

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Literatura de Cordel, Popular Booklets in North-eastern Brazil

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荒井, 芳廣 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004474

ブラジル北東部における民衆的小冊子

——リテラトゥーラ・デ・コルデル——

荒 井 芳 廣*

Literatura de Cordel, Popular Booklets in North-eastern Brazil

Yoshihiro ARAI

Literatura de Cordel is the generic name for popular booklets common in north-eastern Brazil. Based on the author's collection of over six hundred such booklets, this note explains some of their characteristics and discusses the significance of studying them.

The most distinctive feature of *Literatura de Cordel* is its close association with the local oral literature. It is written in verse, and, in addition to being bought by literate persons, is recited or chanted by a bookseller. This type of literary communication has two categories of senders, i.e., author (*poeta popular*) and singer (*cantador de folheto*). The cover is the sole visual element of the booklet and also an important source of information about the author.

These booklets have different processes of diffusion than other types of books. To describe such a booklet provides information about aspects of this process and a thematic classification of their contents gives a concrete image of the mental world of the north-eastern Brazilian. As such, *Literatura de Cordel* is an indispensable topic in the comparative study of popular literature.

はじめに——問題との出会い——

I. 小冊子の形態的諸属性の記述

II. 小冊子の主題分類

——リテラトゥーラ・デ・コルデルの

全体的イメージを把握するために——

III. 小冊子の生産・流通・消費

おわりに——民衆本の比較研究へ——

* 幾徳工業大学, 国立民族学博物館研究協力者

はじめに——問題との出会い——

リテラトゥーラ・デ・コルデル (*literatura de cordel*) は、ポルトガル (およびスペインを含めたイベリア半島) の民衆本の伝統のもとに、19世紀後半、ブラジル北東部諸都市での印刷術の普及とともに生まれ、現在なおセアラ州のジュアゼイロ・ド・ノルテやサルバドール、レシフェなどの大都市を中心に北東部の各地で流通する民衆的な小冊子の総称である。この小冊子は北東部人の産業都市への流出により南部の大都市であるサンパウロやリオ・デ・ジャネイロあるいは首都ブラジリアの衛星都市においても生産され流通している。本稿は筆者が収集した600冊余りの小冊子に基づき、この対象に関する将来の研究における基本的理解事項となることを目的として、主としてこの小冊子の「もの」としての諸側面について検討した研究ノートである。筆者がリテラトゥーラ・デ・コルデルのこうした側面に注目するのは、「民衆本は民衆文化の商品化されたもの」という前提から出発するからである。そこから民衆本を通じてそれらを書きそして読んだ人々のもつ考え方や行動の仕方すなわち民衆文化を内在的に促えようと試みることも我々の課題の一つである。だが本稿ではむしろ民衆本の商品としての側面に強調点を置いて、ブラジル北東部の小冊子をもつ特性を考えてみたい。というのは、いま何の定義もなしに「民衆本」という言葉を用いたが、比較研究というものを念頭において「民衆本」の定義を考えてみようとする場合、民衆本の商品としての特性について知ることは重要な作業の一つであると思われるからである。この側面は、民衆本が研究対象として無視される要因となった。つまり一方では文学作品として文学史から排除され、また一方で民衆文化研究の資料としてもまた口頭伝承に対して二次的なものとしてみなされてきたのである。リテラトゥーラ・デ・コルデルに対する筆者の関心もはじめはどちらかと言えば、この対象を通じてブラジル北東部人の世界観や心性を読み取ろうとすることよりも、民衆本のような事物がどのようなタイプの社会に発生するかという点にあった。このような問題意識は、ハイチ共和国における言語使用と識字教育についての観察から生まれたものだった。この国では国民の大半がクレオール語を用いているにもかかわらず、公用語および教育言語はフランス語であり、従って一般の人々のための書物あるいは出版活動などはほとんどないといっても良い状態であった。ブラジル北東部においてリテラトゥーラ・デ・コルデルに出会った時、ハイチの状況に対する関心は、この社会ではなぜ民衆本が発生しないのかという疑問として表現されるようになった。加えてブラジルの小冊子の先行形態としてのヨーロッパの民衆本について調べるうちに、民衆本とはコミュニケー

ションの形式としてどんな特徴をもっているか、あるいはこのコミュニケーションの形式と社会体系とはどのような関連をもっているかなどという関心も生まれたのである [荒井 1979]。そこに至るまでに筆者が考えたことを語ることはきわめて個人的な事柄であるが、それは同時に民衆本の比較研究においてリテラトゥーラ・デ・コルデルを研究することの意味を明確にすることでもあるので簡単に述べてみたい。

ハイチ、ブラジルそしてヨーロッパという三つの例から、筆者は、民衆文化圏と知識人文化圏の関係、口頭伝承と書物の存在形態をめぐって次の三つのタイプの状況を想定してみた。

〈A〉 知識人の文化圏では文字あるいは（および）活字によるコミュニケーションがかなり自由に行なわれているが、民衆文化圏では依然として口頭によるコミュニケーションしか用いられない。従ってこのタイプの社会における書物とはもっぱら知識人のための本であり、これらが民衆文化圏の口頭伝承から吸収したものを表現することはあっても、民衆文化圏の側が知識人文化圏から吸収したもの、あるいは独自に生み出したものが書物という形を採って現われることは決してない、という状況。ハイチの場合がこれに相当すると思われる。

〈B〉 社会全体としてはまだラジオ、テレビ、新聞などの近代的なマス・メディアの制度の登場以前であるが、知識人文化圏においては既に刊本の形態で書物が存在し、民衆文化圏においては口頭によるコミュニケーションが優勢であるがこの文化圏にも知識人のための書物とは区別された独自の書物の形態、ここでいう「民衆本」とも呼ぶべきものが存在する、という状況。15世紀以降、18世紀までのヨーロッパ社会の場合がこれに相当すると思われる。

〈C〉 書物の存在形態としてはBのタイプとほぼ同じ状況であるが、社会全体としては近代的なマス・メディアを有しながら普及・発達が充分でなく、そのために民衆文化圏においては経済的・地理的原因によりそれらとの接触が充分でないという状況、すなわち近代的なマスメディア、知識人のための書物およびそれと同じ回路で生産／流通される大衆的読み物、それに「民衆本」と口頭伝承がすべて混在している状況。ブラジル北東部の場合はこれに相当すると思われる。

ハイチおよびブラジル北東部の場合は現代において存在する形態であるのに対し、ヨーロッパの場合は歴史的に過去の形態である。しかしAのタイプの場合には過去にも存在しえた形態であり、活字以前や近代的マスメディア登場以降まで、とにかく「民衆本」が存在しないすべての状況を含みうるから、その例の見つかる時間的幅は大きい。ホメロスの作品やヨーロッパ中世の文学と吟遊詩人の伝統との関連、あるいは

はシャルル・ペローの作品と昔話との関連の研究において論ぜられる「口頭伝承と文学との交流」の問題は、「民衆本」の存在あるいは非存在を無視して、Aのような状況を想定している。リテラトゥーラ・デ・コルデルの研究対象としての意義は、民衆本の研究においてばかりでなく、こうした「書かれたもの」一般と口頭伝承との関連を明らかにするうえからも見過ごすことができない。こうした研究動向において主導的な役割を果たしているA・B・ロードにおけるホメロスと現代東欧の吟遊詩人との関連やP・ツムツールにおけるフランス中世の文学と吟遊詩人との関連は、いずれも文献による類推あるいは時間的に遠く隔ったもののあいだの類推でしかない。これに対し、リテラトゥーラ・デ・コルデルの場合には、「書かれたもの」すなわち民衆本と口頭伝承のいずれもが現在も生きた対象として観察可能である。この点については、Ⅲの(2)および(3)においてある程度は論じるつもりである。

次に民衆本の他の諸形態との比較、先に挙げた三つの状況との関連で言えばヨーロッパの民衆本との比較は重要な課題であるが本稿では扱っていない。ただし民衆本とは何かということを考えるうえで、ブラジル北東部の小冊子を研究することの意義はヨーロッパとの比較によって生じてくると思われる。そこでJ・マルコが18世紀および19世紀のスペインの民衆本について挙げている六つの特性を本稿との対照枠組として紹介しておこう。マルコ [MARCO 1977] によれば、この民衆本 (pliegos sueltos) は一般民衆の誰もが入手しやすいよう安価で伝達の媒体についても際立った特徴をもっている。すなわち①安価な紙に印刷され製本もされていないために、すばやく読まれかつすぐに破損する；②たとえば16世紀の大型の騎士道小説に比べて持ち運び易い；③本屋が少なく他の文学的生産物は容易に入手することができなかった時代に、町や小さな村でも簡単に手に入れることができた。従って買い手市場の文学であった；④内容を修正せずそのまま子供用の読み物として用いられた；⑤テキストの理解を容易にするために版画が付されている；⑥盲人の口頭伝承者および朗唱者、以上六つの特性である。これは18世紀および19世紀スペインの民衆本の研究に対する観察にもとづくものであるため、他の地域、あるいは他の時代の民衆本に対してここに挙げられている特徴が当てはまるとは言えない。例えばブラジル北東部の小冊子の場合には盲人の占める位置はスペインにおけるほど重要ではない。ただし盲人の存在を指摘することによりブラジルとスペインとの差異が明らかになるばかりでなく、民衆本の流通において盲人のような「文化的媒介者」の存在を忘れてはならないという事実を明らかにしている。

次に民衆本の定義の構成に欠かすことのできないいくつかの項目を探るために先に

挙げた三つの状況を比較し、次のような問題を設定してみた。

(イ) BおよびCの場合は、社会全体にマス・コミュニケーションの体系が存在するか否かを除けばおおよそ同じような条件となるが、どちらの場合にも存在する「民衆本」はほぼ同じ性格のものなのか、もし異なる性格のものならばその差はいかなるものなのか、という問題。

(ロ) Bの場合には、Bの状態から今日われわれが置かれているような、マス・コミュニケーションの制度が発達し、知識人文化と民衆文化とが同種の回路を通じて生産・流通・消費される、いわゆる大衆文化状況へと歴史的に移行してきたのであるが、仮に後者をDのタイプとするならば、AからBあるいはCへ、BあるいはCからDへの移行は必然的なものとみなしてよいのか、という問題。より具体的な関心として、ハイチの民衆文化のなかからヨーロッパで17世紀および18世紀に盛んに流通した民衆本の諸形態やブラジル北東部で現在も流通するリテラトゥーラ・デ・コルデルに相当するような書物の形態が現われてくるだろうか、もし現われてくるとしたら、いつ頃、どのような形態で、どのような条件が備わった時に発生するのだろうか、という研究課題がある。別の言い方をすれば、同じ新大陸においてなぜブラジル北東部では民衆本が発生し、ハイチでは発生しなかったかと問うことである。つまり発生条件から民衆本を定義しようとする試みである。この課題に関しては本稿ではほとんど触れることができなかったが、筆者が民衆本発生の要因として考えているものを挙げておこう。

その第一は「印刷術」である。これは民衆本発生の技術的条件である。その普及の度合いばかりでなく、印刷技術の習得や継承などのあり方も関与する。

第二に「識字率」という要因が挙げられる。これには当該社会がどの程度の識字率であるかという問題とその識字能力の内容すなわち個人がどの程度まで読み書き能力をもっているかという問題とが含まれている。前者はコミュニケーション体系と近代化との関連を論ずる研究者によってとりあげられる主題である。民衆本という社会的にやや低い階層に属する読者を対象とする書物の発生にはある程度の識字率は必要であるが、その能力について詳しく検討してみると識字能力にいくつかの段階があることがわかる。民衆本の書き手には完全とまでいかなくともある程度の読み書き能力が必要であるが、読者には必ずしも書く能力は要求されない。しかも読む能力にも声を出さず読んで理解のできる場合と声を出し読むことによって結局は耳から理解する場合では差異がある。それゆえ識字率と言っても民衆本の発生には読み書きのできる者の割合ばかりでなく、専ら読むことしかできない者の割合が大きく関与してくるので

ある [FURET and Ozouf 1977]。

第三の要因として「文化的媒介者の存在」が考えられる。この概念には情報の伝達という観点からは民衆本の作者も含まれるが、民衆本という「もの」の伝達を考えると、これを売る販売人を指している。しかもヨーロッパおよびブラジルの例で考えるかぎり、このカテゴリーに属する人々の行動は、買い手を求めてある場所から別の場所へと移動することに特徴をもっている。これは民衆本発生の条件というより社会的・地理的な要因の結果であり、また口頭伝承の時代以来の文化的伝統とも関連している。

本稿ではこれらの要因について直接には論じていないが、リテラトゥーラ・デ・コルデルを「もの」としてその生産・流通・消費の過程に分解して考察してみると、ブラジル北東部の場合にこれらの要因がいかなる形で関与したかを示したつもりである。

I. 小冊子の形態的諸属性の記述

リテラトゥーラ・デ・コルデルのもつ諸側面に関する一般的な説明を行なう前に、



写真1

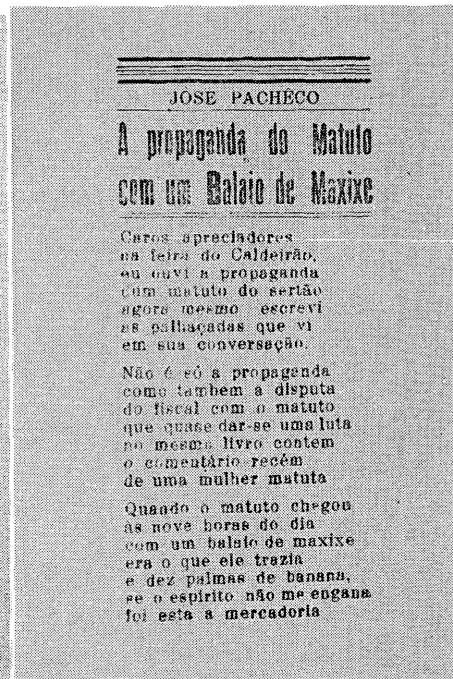


写真2



写真3

この対象についての具体的なイメージを提示し、一冊の本がもつ本文の内容以外の側面（韻律の形式を含む）からどのような種類の情報を獲得することが可能であるかを知るために筆者自身の収集のなかから一冊を記述し説明しよう。写真1・2・3はジョゼ・パシェコ作の『ひょうたんの容れ物を持った田舎者のプロパガンダ』という題をもつ8ページの小冊子の表紙、本文の第1ページおよび裏表紙である。大きさは16 cm (縦) × 10.5 cm (横) で、この三つのスペースのレイアウトに関して最も典型的であるとは言えないが、よくみられる形の一つであると言える。小冊子の記述の方法としてその検索やテキストの同定のために研究者たちに

現在よく採用されているのが、CASA DE RUI BARBOSA が1961年に発行した『カタログ』[CASA DE RUI BARBOSA 1961] が用いている記述方法である。このカタログには1000冊の小冊子選ばれて記載されているが、ここに例として挙げたジョゼ・パシェコの小冊子もそのなかに入っている。そこでまずこの小冊子が『カタログ』でどのように記述されているかを紹介し、われわれの記述の出発点としよう [CASA DE RUI BARBOSA 1961: 55]。

161-CNEDAA-PROPAGANDA DO MATUTO COM O BALAI DE MAXIXE

AUTOR: José Pacheco; EDITOR: s/ind.; CAPA: clichê; LOCAL: s/ind.; DATA: s/ind.; PP.: 8. ∩ METRO: sete sílabas; ESTROFE: de sete versos (32); ESQUEMA DE RIMAS: xaxabba; FINAL: estrofe regular.

1º Verso: Caros apreciadores

10º Verso: Do fiscal com o matuto

Último: Pagando só um cruzeiro. (Col. CP)
 OBS. Consta, na ilustração da capa, a data de 1944.

リテラトゥーラ・デ・コルデルの「民衆本」としての特徴は韻文で書かれているところにあるが、「CNEDAA」というアルファベットは、その第一連の一行目から六行目までの書き出しの文字を採ったものである。『カタログ』ではこの六文字をアルファベット順に並べその順番によって各冊子に番号が付けられている。すなわちこの小冊子は161番ということになる。この六文字はまたある小冊子本文がカタログの小冊子と同一のものであるか否かを判断する標識の一つとなっている。写真2と照合してみると同一のテキストであることがわかる。写真1・2・3の小冊子は1980年8月にサンパウロで10クルゼイロで買ったものであるが、『カタログ』の記述と対照してみるといくつかの相違点に気づく。まず版元について『カタログ』は「表示なし」としているが、写真3の上方に「Literatura de Cordel. José Bernardo da Silva Ltda.」と出版元の名前が明記されており、『カタログ』の記述の原本と筆者所有の小冊子とは異なる版であることがわかる。そこで前者をA、後者をBとして両者の比較を進めてみる。表紙については『カタログ』の記述のもととなった原本が未見なのでどのようなものであるかは不明であるが「clichê」とあるので、写真あるいは線画であると考えられるのに対し、Bは木版の表紙絵が付けられている。発行地および発行年月日についてはAはいずれも「表示なし」としているが、Bは本文の末尾に「Juazeiro, 18/10/76」と明記され、また裏表紙の出版元名の下に印刷されている住所からも推し測ることができる。ページ数…8ページ、各詩句の音節数(METRO)…7音節、各詩節の行数(ESTROFE)…7行、脚韻の構造(ESQUEMA DE RIMAS)…xaxabba についてはAとBは一致しているが、ただ詩節の数がAでは32とあるのに対しBでは31連しかない。そこで『カタログ』の小冊子との同一性を判断する標識として記されている1行目、10行目、最終行の詩句を比較すると1行目と10行目は同一であるが、最終行は異なっている。おそらくBにはAの第32連すなわち最終連が除かれてしまっていると推測することができる。その理由はこの場合に限って言えば最終行の「たった1クルゼイロ払うだけ……。」という詩句にあると想像される。筆者が小冊子の購入に際して支払った代金は1978年には5クルゼイロ、1980年には5クルゼイロまたは10クルゼイロであった。従って最終連はA、Bとも7行(estrofe regular)で同一であるが、実際に『カタログ』が記述しているのはBの最終連ではないことがわかる。さらに備考として「表紙の絵から1944年の日付と推断される」とあり、Bは1976年に発行され

たことが明記されているからAとBとは同一の内容であっても異なった版であることがわかる。ただし『カタログ』は原本として必ずしも初版を採用しているわけではないという断り書きがある。

作者のジョゼ・パシエコは小冊子の数ある作者のなかでも優れた詩人の一人であると言われるが、その生涯についてはあまり知られていないようである。『人名・作品目録』(Dicionário Bio-bibliográfico de Repentistas e Poetas de Bancada 1978: 204-205.) では1890年にアラゴアス州のポルト・カルボで生まれたとしているが、別の文献では生年の記載はなくペルナンブコ州のコレンテスで生まれたとしている[BATISTA 1977: 251]。亡くなった土地についてはいずれもアラゴアス州のマセイオとしており生涯の大部分をマセイオで過ごしたと思われるが歿年については前者が1950年代とするのみでこれも明確ではない。『人名・作品目録』には37の小冊子の題名が記載されているが、動物を主人公にした小冊子と笑い話を得意とし、ここに挙げた小冊子も笑い話に属するものである。

写真1の木版画(表紙)の作者であるステーニオは『北東部の木版画家たち』[CASA DE RUI BARBOSA 1977d: 163]によれば、本名を José Stênio Silva Dinis と言い、1953年12月にセアラ州のジュアゼイロ・デ・ノルテに生まれている。この小冊子の出版元である Grafica Literatura de Cordel の創設者である José Bernardo da Silva の孫にあたる。彼は小冊子の生産のうち表紙の木版画にのみ携わり、小冊子の表紙以外にもっと大きな作品はジュアゼイロ・デ・ノルテの公設市場で民芸品として売られ、その作品には「STÊNIO」あるいは「STÊNIO DINIS」という銘が刻まれている。

『カタログ』の注意書きを信ずるなら小冊子Bは小冊子Aから30年以上も後に出版されたというばかりでなく、表紙からも異なった版であることが明らかである。版が異なると本文は同一であっても表紙が異なるという現象はこのように時間的に隔てられた版のあいだでばかりでなく、現在発行されている小冊子のあいだにも観察できる現象である。写真4の二つの木版画は、写真1と同じ本文の異なった表紙である。一つは木版画の作者も発行地も不明であるが、もう一つの「J. BORGES」という銘のある木版画をもつ小冊子はペルナンブコ州のベゼロスに住む1935年生まれの José Francisco Borges によって発行された小冊子であると思われる。彼は自身で小さな印刷所を所有し小冊子を書くが、それ以上に北東部における最良の木版画家の一人として評価され、木版画だけの展覧会をサンパウロやリオ・デ・ジャネイロにおいて開いている。

後に詳しく述べるが Grafica Literatura de Cordel から現在発行される小冊子で



写真4

この出版元が著作権を有するものには表紙に必ず「Proprietárias: Filhas de José Bernardo da Silva」と印刷されているが、写真1の小冊子の場合にはこれがなく、いくつかの異なる版が存在するのは、ジョゼ・パシェコの小冊子には著作権を有する者がなく、誰でも自由に出版できることを意味している。

裏表紙(写真3)の最上方には、この小冊子の出版元の名前と住所が印刷されている。この Grafica Literatura de Cordel は、自分自身も小冊子の作者であった José Bernardo da Silva によって1905年に創設され、始めは Tipografia São Francisco の名の知られていた1950年代以降現在まで最も大きな小冊子の出版元の一つである。この出版元のあるセアラ州のジュアゼイロ・ド・ノルテは、この州の州都フォルタレーザから 580km の道のりの奥地にある人口約9万6000人の小都市である。この町はかつて「シセロ神父の運動」として知られるメシア主義的な宗教運動の中心地であり、現在もシセロ神父を慕う人々の巡礼の地であり、3月24日のシセロ神父の誕生日、9月1日の巡礼の日には近郊ばかりでなく北東部の各地からやって来る人々で賑わう。観光案内書にはこの出版元が見所の一つとして観光コースにさえ入っていることからわかるように、小冊子はこの地を訪れる巡礼者の土産物の一つになっている。

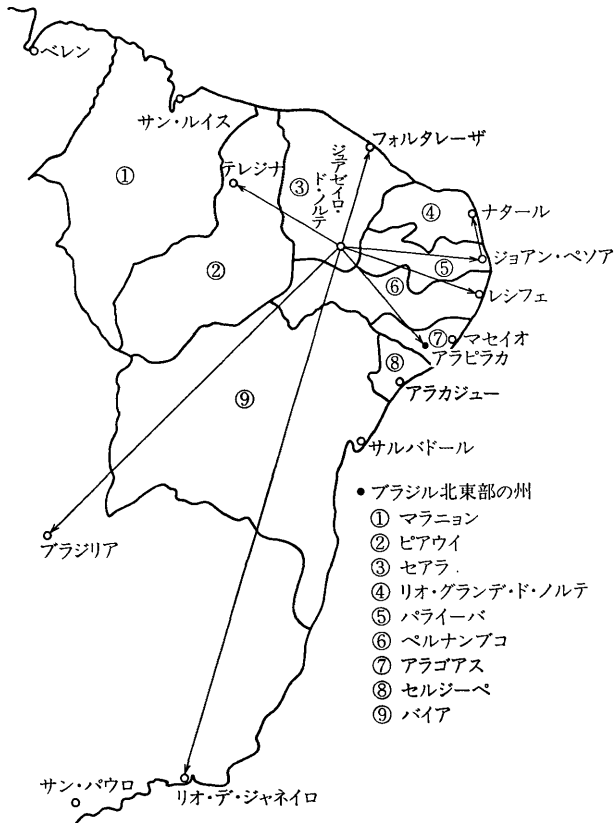


図1 Grafica Literatura de Cordel とその Agentes

出版元名の下には「AGENTES」すなわち各地の取次人の名前と住所が7つ挙げられている。このなかで『人名・作品目録』でその名前が照合できるのは João Severo da Silva のみで、あとの6人については記載がない。ということは取次人は必ずしも小冊子の作者であったり歌い手であったりする必要のないことを意味している。ジョアン・セベロ・ダ・シルバは『人名・作品目録』には13の小冊子名が挙げられ、1942年生れで、農夫、新聞配達人、印刷工、商人などの職業を転々としたとある。取次人の住所は Arapiraca を除いてはいずれも州都であるが、ジューゼイロ・ド・ノルテとの位置関係から小冊子の流通圏をイメージすることができるであろう。

Ⅱ．小冊子の主題分類

——リテラトゥーラ・デ・コルデルの

全体的イメージを把握するために——

前節では特定の一冊を選んで小冊子の個別的なイメージを明らかにしようと努めた
が、この節では小冊子の主題分類についての試みの検討を通じて、リテラトゥーラ・
デ・コルデルが北東部人の生活のどの範囲にまで目を配りそしてその独特の観点を表
現しようとしているかということを明らかにしよう。

(1) 研究者の分類法

これまでに出版された、われわれが知る限りにおいても数千種類に及ぶ小冊子を
何らかの基準で分類しようとする試みは数多くなされている [BENJAMIN 1970;
AZEVEDO 1973; DIÉGUES JUNIOR 1973, 1975; MARANHÃO 1976; PROENÇA
1977 など]。それらのほとんどが小冊子の研究者による分析的な分類であり、どのよ
うな基準でそのように分類するのかということが必ずしも明確でないものが多い。ま
た分類された各ジャンルの説明もまた小冊子の内容に即せず研究者により無理矢理に
つくられたという印象を与えるものがある。だが最近のものは分析的な分類であって
も、以前の分類法を修正し分類された各項目の解釈に小冊子の作り手の解釈を加えな
がら、その分類法を特定の個人ではなくリテラトゥーラ・デ・コルデル全体が有して
いる一種の世界観へと近づけようとする努力がみられる。こうした試みの一例として
ディエーゲス・ジュニオル [DIÉGUES JUNIOR 1975: 13] の分類法を示そう。

1. 伝統的テーマ

- a) ロマンズとノベラ; b) 奇談; c) 動物説話; d) アンチ・ヒーロー; 事件と悪事;
e) 宗教伝承;

2. 時事的状況的な事実

- a) 自然現象: 大水, 洪水, 旱魃, 地震など; b) 社会的反響: 祭り, スポーツ, 小
説, 宇宙飛行士など; c) 批判と諷刺; d) 人間: 実在の人物 (ゼツーリオ, 狂信主
義あるいは神秘主義物, 匪賊物など); 人種的人間類型, 地方的人間類型など。

3. 歌唱と歌競べ (Cantoria と Peleja)

(2) 小冊子生産者の分類法

小冊子の主題分類をその生産に携わる人々の世界観を表わすものに近づけようとす

る努力をさらに極端な形にまで押し進めたのがリエード・マラニャンが提唱する「民間分類」(classificação popular)である。これはマラニャンが北東部7州に住む100人以上の作者・出版人、取次人、販売人などへのインタビューによる調査にもとづいて作成したものである。小冊子の生産・流通に直接携わる人々の会話のなかで実際に使用される用語から構成される「商品」としての小冊子分類法である。この分類法はリテラトゥーラ・デ・コルデル研究のなかで、分類についての研究成果として一つの達成を示すものとして現在すでに高い評価を受けている。こうした研究方法あるいは視点はアメリカ合衆国の民俗学が近年盛んに提唱している「コミュニケーションの民族誌」(ethnography of communication)あるいは「民俗的ジャンル論」(folk genre)の概念に通ずる考え方である。この分類法が確かに「民間分類」として妥当なものであることを確定するには再調査をする必要があると思われるが、方法論的には先駆的業績として今後も評価されるであろう。分類の仕方それ自体は、前述の研究者の分類法と比較して、それほど体系的であるとは言えない。ジャンルとジャンルのあいだの区別が曖昧であったり、その区別に異なった基準が混じっている。それはおそらく作者の執筆の動機、出版人や販売人の整理の都合、読者側の需要、あるジャンルに属する作品の数、時代の傾向といった様々な要素がこの分類法に反映されているからであると考えられる。従ってこの分類法は伝統的というよりむしろ現代的であると言えるであろう。マラニャンはこれを1976年に発表しているから、その時点での小冊子についての『民間分類』と言った方が正確である。

この分類法が以上で述べたような性格をもっているという理由と、加えて非常に具体的であって小冊子が北東部人の精神的物質的生活のどのような領域を扱おうとしているか、その全体像を与えてくれるであろうという二つの理由で、以下この分類法に従って、マラニャンの註解をも参照しつつ解説しよう。各分類項目の末尾に筆者自身が収集した小冊子のなかからそのジャンルに属するものを何点かそのタイトルを記し、さらにそのジャンルに関するモノグラフがある場合にはその文献を挙げて置きたいと思う。

〈FOLHETO と ROMANCE〉小冊子はまずそのページの数から folhetos と romances に分けられる。すなわち8ページと16ページの冊子は folheto, 24ページ, 32ページ, 64ページの冊子は romance と呼ばれている。これら二つの区別は、内容的には以下に示すような区別があるが、部分的には重複するところがある。ページ数の違いは端的には値段の差となって現われる。1980年に筆者が小冊子購入のさいに要求された代金は平均すれば前者が10クルゼイロ、後者が20クルゼイロであった。小冊子を商品と

見た場合には重要な差違であろうと思われる。

〈FOLHETO の種類〉 folhetos には次の23の種類がある。

① Folhetos de Conselhos (忠告の小冊子)：青年たちに対しては青春の無軌道さを戒め、妻たちには夫の不実を教える、というように、作者が読者へ忠告を与えるという形の小冊子。Alipio Bispo dos Santos: 《Conselhos à Juventude》。

② Folhetos de Eras (終末論の小冊子)：読者にこの世の終わりの近いことを告げ、救済を望むならば聖書の教えに忠実に従って行動することを勧める小冊子。〈墮落〉、〈予言〉などを主題とする小冊子と隣接するジャンルである。Rodolfo Coelho Cavalcante: 《O Dragão do Fim da Era》。

③ Folhetos de Santidades (聖なる存在の小冊子)：神、キリスト、聖人、聖母マリアなど聖なる存在の生涯、あるいはその顕現や奇跡などを語る小冊子。João de Barros: 《O Homem de Nazareth》, José Patricio: 《Historia Sagrada—As Sete Espadas de Maria Imaculada》, Manoel Camilo dos Santos: 《Um Grande Milagre de São Francisco do Canindé》。

④ Folhetos de Corrupção (墮落の小冊子)：遊びに浮身をやつしたり現代風俗にかぶれたり、あるいは夫が死んでまもないのに愛人と連れ立って歩く未亡人など、小冊子が依って立つ道徳観から外れた行動について語る小冊子。そうした類廃は特定の政治的宗教的イデオロギー（共産主義、マクンバなど）と結びつけられたり、終末論的な観点から語られることが多く、終末論や〈予言〉の小冊子と隣接するジャンルである。Expedito Sebastião da Silva: 《A Marcha dos Cabeludos e os Usos de Hoje em Dia》,—《A Devassidão de Hoje em Dia》。

⑤ Folhetos de Cachorrada ou Descaração (破廉恥行為の小冊子)：性的なテーマを後述の Folhetos de Putaria ほどあからさまな言葉を用いずほめかす程度に表現する艶笑的な小冊子。現代ではフェイラ・デ・サントアナに住むエロチルド・ミランダの得意とするジャンルである。Erotilde Miranda dos Santos: 《Palestra das 3 Donzelas》。

⑥ Folhetos de Profecias (予言の小冊子)：文字通り予言を語る小冊子であるが、〈シセロ神父〉、〈ダミアン師〉、〈墮落〉、〈世紀末〉の小冊子もまた予言を内容とするので、このジャンルは予言を主題とする小冊子のなかで上記4つのジャンルに属するものを除いた小冊子とすることができる。北東部の民衆のあいだに伝統的に見られる予言主義的な傾向について知るための重要な資料でもある。Manoel Vicente dos Santos: 《A Grande Profecia de Daniel》, João de Cristo Rei: 《Profecia de Frei Vidal da

Penha para o ano de 1960》, Caetano Cosme da Silva: 《Profecia e Almanaque do Grande Sábio Francês de 1976 até 1980》. [CANTEL 1970]

⑦ Folhetos de Gracejo (笑い話の小冊子): 市場に集まる田舎者を笑わすことを目的とした小冊子。前述のジョゼ・パシエコはこのジャンルを得意としていたと言われる。社会批判や諷刺的な内容をもつ場合には、時として警察の取締りの対象となり、それが原因で小冊子の作者を辞めた者が何人かいると言われる。Manoel Camilo dos Santos: 《Viagem a São Saruê》, José Pacheco: 《A Chegada de Lampião no Inferno》.

⑧ Folhetos de Acontecidos ou Epoca (時事の小冊子): 実際に起きた事件を報道し解説する小冊子。他の小冊子の場合にも、歴史的イベントや非現実的な出来事を作者があたかも実際に見て来たごとく語るという形をとっていることが多いが、この場合はあくまで新聞や雑誌などですでに知られた最近に起きた現実の出来事を題材としている。事故、天災、有名人の死亡、スポーツ、国際的ニュース、地方的ニュースなどが主たるテーマである。レシフェのジョゼ・ソアレスおよびジュアゼイロ・デ・ノルテのアブラン・パチスタがこのジャンルを得意とするが、特に前者は「Poeta-Reporter」と自称し、このジャンルを専門としている。近年で最も多く的小冊子が取り扱ったテーマは、1980年の法王ジャン＝パウロ二世のブラジル訪問で、このテーマだけで30種以上の小冊子が発行されたと言われる。José Soares: 《A Tragedia de Jaboatão 23 Mortos e 35 Feridos》; 《A Morte de Juscelino Kubistchek》; 《A Seleção do Brasil ganhou mais um Caneão (4×1)》, Rodolfo Coelho Cavalcante: 《A Morte de Zé Arigó. O Famoso Médium de Minas Gerais》, Abraão Batista: 《Os Uruguaios que Comeram Carne Humana》; 《A Corrupção no Ceará e Intervenção Imprevisível do Governador em Juazeiro do Norte-Ceará》, Zepraxédi: 《A Visita de Sua Santidade o Papa João Paulo II ao Brasil》 [CANTEL 1965].

⑨ Folhetos de Carestia (物価高物の小冊子): 目方をごまかし暴利を貪る商人やインフレーションの原因となる政府の政策を批判する小冊子。商人たちの集まる市場で読み上げられるので、その当てつけの効果は大きくまた笑いを誘うものと思われる。José Costa Leite: 《O Homem que Foi Se Enforsar com Medo da Carestia》, Minelvino Francisco Silva: 《A Marreta da carestia》, João Lucas Evangelista: 《O Sofrimento do Povo nas Garras da Inflação》.

⑩ Folhetos de Exemplos (見せしめの小冊子): 神を冒瀆したり罪を犯したり人間に対し神あるいは聖人から懲罰として行なわれる様々な事績について語る小冊子。

João de Cristo Rei: 《Exemplo d'um Rapaz Morreu e Tornou》, João de Barros: 《Bebê Diabo Apareceu em São Paulo》.

⑪ Folhetos de Fenômenos (怪奇現象の小冊子): 人々の心に衝撃を与えるような不思議な現象について語る小冊子。このような現象は罪に陥っている人々を目醒めさせ正しい道を教えるために神から与えられる「みしるし」であると解釈される。従って〈見せしめ〉の小冊子と隣接するジャンルである。Abrão Batista: 《O Fenômeno do Bode que Nasceu Metade e Metade Bode》.

⑫ Folhetos de Discussão (議論の小冊子): 価値観や立場を異にする人々のあいだで行なわれる議論をテーマとした小冊子。登場する人物はプロテスタント(Crente), 酔っ払い, 警官, 税務監査官, 神父などで, なかでもプロテスタントは聖書を片手に誰にでも議論をふっかけ人間として小冊子にたびたび登場し, 木版の表紙にその姿が描かれる。Manoel de Assis Campina: 《Discussão dum Fiscal com uma Fateira》, Vicente Vitório Melo: 《Discussão do Crente com Cachaceiro》, Olegario Fernande: 《A Discussão do Padre com Ateu》, Rodolfo Coelho Cavalcante: 《A Discussão de GUIDO GUERRA com uma Testemunha de Jeova》.

⑬ Folhetos de Peleja (歌競べの小冊子): 作者が自分と自分の知っている他の詩人, あるいは自分以外の二人の詩人の出会いを想定して創作した対話体の小冊子。ブラジル北東部の口承文芸には二人の詩人が相手の言葉に対し韻を踏みながら音楽に乗せて即興的に互いをけなし合う *Desafio* というジャンルがあり, この小冊子はこのジャンルとの連続性をもっていると思われる。録音技術の普及していなかった時代に優れた詩人たちのあいだで行なわれた *Desafio* を書いて残した行為にこのジャンルの小冊子の起原を求めることができる。小冊子の作者たちはこのジャンルの小冊子を書くことを望み, 実際に出回っている数も多い。José Gustavo: 《Peleja de José Gustavo com Maria Roxinha da Bahia》, Manoel Camilo dos Santos: 《A Grande Peleja de Ivanido Vila Nova com Manoel Camilo dos Santos》, 《Peleja de Téo Azevedo com JOTABARROS em Martelo》, João Martins de Athayde: 《Peleja de Bernardo Nogueira com Preto Limão》.

⑭ Folhetos de Bravuras ou Valentia (勇敢な行為の小冊子): 匪賊を保護する農場主, 極悪非道の黒人, 結婚するために若い娘を攫う者など奥地を舞台としそこに生きる牧童 (Vaqueiro) や匪賊 (Cangaceiro) などの人間類型を主人公に北東人の目から見て大胆不敵と思える行動について語る小冊子。《O Encontro de Dois Errados》,

Severino Borges da Silva: 《Bravuras de um Sertanejo》, João Martins de Athayde: 《Historia do Valente Vilela》, Manoel Caboclo e Silva: 《O Encontro do Negrão com o Monstro do Rio Negro》.

⑮ Folhetos de A B C (Ā B Ć の小冊子): 各連の始まりの文字が A, B, C … とアルファベットの文字とし、その順序に並べられた24から26連の六行詩 (sextilha) または七行詩 (septilha) から構成される小冊子。このジャンルは内容によってでなく叙述の形式によって他の小冊子と区別される。〈歌競べ〉の小冊子と同様、ABC は口承文芸との連続性をもったジャンルである。内容は、作家、政治家、匪賊などの著名人の業績や生涯の要約、都市案内、愛についての初歩的知識、呪術的宗教や売春婦など覗き見的興味をそそる話題などさまざまである。Rodolfo Coelho Cavalcante: 《ABC de Jorge Amade》, 《ABC de Lucas da Feira》, Erotildes Miranda dos Santos: 《O ABC do Amor》, Paulo Nunes Batista: 《ABC a Goianópolis》, Vivência Macêdo Maia: 《ABC da Umbanda》.

⑯ Folhetos de Padre Cícero (シセロ神父の小冊子): リテラトゥーラ・デ・コルデル出版の現在の中心地の1つであるジュアゼイロ・ド・ノルテにあって19世紀後半から20世紀初頭にかけて展開されたメシアニズム的な宗教運動の中心人物であったシセロ神父 (Cícero Romão Batista 1844–1934) を主人公とし、その生涯、奇跡、予言、説教などについて語る小冊子。従って本来はいくつかの異なるジャンルに属する小冊子が、シセロ神父を主人公とするものの数があまりに多いために一つの区別されたジャンルを構成している。このことは別の角度から見ると、北東人が物事を眺め解釈する時の枠組をシセロ神父の生涯と事績が提供していると考えられる。ただしシセロ神父を主人公とする小冊子の出版は、ジュアゼイロ・ド・ノルテおよびペルナンブコ州の各都市に集中しているから、シセロ神父への信仰を小冊子全体のもの、あるいは北東部人一般のものとするのは未だ検討の余地があると思われる。また小冊子のなかには次に述べるダミアン修道士が自分の後継者であることをシセロ神父が夢や手紙で示すという形式を採っているものもある。João de Cristo Rei: 《Historia da Guerra de Juazeiro em 1914》, Enoque Josá de Maria: 《A Voz do Padre Cícero》, Manoel Caboclo e Silva: 《O Sermão do Padre Cícero》, João de Barros: 《O Rapaz que Virou Cachorro porque Zombou do Padre Cícero Romão》, Abraão Batista: 《O Cego de Várea Alegre e o Milagre do Pe. Cícero》, José Costa Leite: 《O Sonho de Frei Damião com o Padre Cícero Romão》, Raimundo Santa Helena: 《Duelo do Padim Ciço com o Papa》.

⑰ Folhetos de Frei Damião (ダミアン修道士の小冊子)：北東部を巡回説教してこの地方の民衆からカリスマ的存在として信仰を集めているイタリア人フランシスコ修道士ダミアン(1898年イタリアの Bolzano に生まれ、1931年にイタリアからブラジル宣教に出る。)を主人公とし、その説教、予言、奇蹟、懲罰などについて語る小冊子。小冊子のなかでのダミアン師の役割はシセロ神父のもっていた属性をそのまま受け継ぎ、〈シセロ神父の小冊子〉とともにこの地方の人々がもっている宗教的心性のあり方を如実に表現している。Manoel Seráfim: 《O Homem que Atirou em Frei Damião e Virou num Urubú》, Romildo Santos: 《O Terrível Castigo para os Ladrões que Foram Roubar Frei Damião》, José Pedro Pontual: 《Verdadeira Profecia de Frei Damião》, José Costa Leite: 《Todo Sertanejo Vive com Fé em Frei Damião》, Abraão Batista: 《A Proibição do Bispo do Crato contra Frei Damião e o Porquê》. [MOURA 1978].

⑱ Folhetos de Lampião (ランピオンの小冊子)：北東部で活躍した匪賊のなかで最も有名な一人であるランピオン(本名 Vilgolino Ferreira da Silva, 1898-1938)を主人公とし、その生い立ち、治安当局との戦い、シセロ神父との出会い、その仲間たち、愛人マリア・ボニートとの愛、その最期が語られる小冊子。こうした小冊子および彼を主題とする俗謡は、彼の生きていた、その名が知られ始めたばかりの1925年には既に作られ、その数は150以上にのぼるとされる [CASCUDO 1972]。従ってこのジャンルはこの時代には史実あるいは伝説としてではなく時事的ニュースとして人々に受けとられていた。現在われわれが読むことのできる小冊子には史実ばかりでなく、地獄で悪魔と議論をしたり、天国で聖ペドロと議論するランピオンの姿を描く、彼を主人公とした笑い話的要素をもったフィクションも含まれている。José Cavalcanti e Ferreira Dila: 《Lampião e Quelé》, Rodlfo Coelho Cavalcante: 《ABC de Maria Bonito, Lampião e seus Cangaceiros》, João Fernandes de Oliveira: 《O Último Dia de Lampião》, João de Barros: 《Lampião e Maria Bonita no Paraizo do Édem, Tentados por Satanás》, José Pacheco: 《Debate com S. Pedro》; 《A Chegada Lampião no Inferno》.

⑲ Folhetos de Antonio Silvino(アントーニオ・シルビーノの小冊子)：ランピオンと並び称される匪賊アントーニオ・シルビーノ(本名 Manuel Batista de Moraes 1875-1944)の生涯、数々の武勇伝、その手下、その逮捕・裁判・牢獄生活などについて語る小冊子。彼が匪賊として活躍したのは1900年から1914年のあいだで、ランピオンは逮捕によって彼の匪賊としての生活が終ると入れ変わるようにしてその名を

知られるようになった。アントーニオ・シルビーノは匪賊であるにもかかわらず、その行動の勇敢さを讃えられ、口承文芸および小冊子を通じて最も人気のあるヒーローの一人である。初期の優れた小冊子作者で出版人であったフランシスコ・ダス・シェーガ・バチスタ (Francisco das Chaga Batista 1882-1930) は「アントーニオ・シルビーノの年代記者」と呼ばれ、彼についての小冊子を数多く書いている。José Cavalcanti e Ferreira Dila: 《De Antonio Silvino a Lampião》, Manoel Caboclo e Silva: 《Os Cabras de Antonio Silvino》, Francisco Alves Martins: 《História de Antonio Silvino e o Negro Corrupião》, José Coste Leite: 《A Chegada de Silvino na Vila Macaparana》 [SOUTO MAIOR 1970].

㊶ Folhetos de Getúlio (ゼツーリオの小冊子)：三十年革命により共和国大統領となり、一時下野したのち再び大統領になったが、1954年8月24日に自殺によってその生涯を終えたゼツーリオ・バルガス (Getúlio Vargas 1883-1954) についての小冊子。「労働者の守護者」(defensor dos marmiteiro) と綿名されていた下野時代 (1945-1950) の小冊子もあるが、特に数多いのは1954年8月24日の彼の悲劇的な死を報じた小冊子である。ブラジル北東部の諺に「八月はいやな月」(agosto desgosto) という表現があり、この月には好ましくない大事件や有名人の死が多い月とされているが、とりわけ8月24日は「聖バーソロミューの大虐殺」の日であり、小冊子はバルガスの死の日を「すべての良きブラジル人にとって悲しく酷い日」と表現している。1940年代および1950年代は小冊子出版の全盛期であり、このジャンルの小冊子はこの時代を代表するものであった。現在はそれほど多く出回っておらず、本来は時事物に属する小冊子である。Paulo Teixeira de Souza: 《Recordação e Lembrança do Ex-Presidente Vargas》 [CANTEL 1965, 1972; LESSA 1973].

㊷ Folhetos de Safadessa ou Putaria (ポルノグラフィの小冊子)：このジャンルの小冊子は、取締りの対象となるために公には売られていない。1950年代にこのジャンルは流行ったとされるが、この時代に Delarme Monitero が“A Vida Secreta de um Rapaz Solteiro”という小冊子を出版したために当局から印刷所の閉鎖を命ぜられるという事件があり、一方、Rodlfo Coelho Cavalcante ら有志が小冊子の道徳性を守ろうと自主規制を主張した。以来、このジャンルの小冊子の出版は公になされることがなくなった。筆者はこの種類の小冊子を収集することができなかったが、匿名の小冊子が秘密裡に売られていると言われる。

㊸ Folhetos de Política (政治の小冊子)：政治の分野で起きるさまざまな出来事について語り解釈する小冊子。汚職、経済政策、政治運動などさまざまな種類のテー

マが取り扱われるが、なかでも最も多いのが選挙をテーマとしたものである。候補者の説演や公約の偽瞞性を突くという形のものが多いが、この形の小冊子は選挙キャンペーンにおいて対立候補の委託で出版される場合もあり、この場合には次のプロパガンダの小冊子に近くなる。José Soares: 《Feito da Revolução e Reformas Políticas》, Carolino Leóbas: 《O Presidente que veio Salvar o Povo que sofre nas Garras da Inflação》, Willians M. Gomes de Barros: 《O Movimento Estudantil e as Duchas Erasmo em São Paulo》, Abraão Batista: 《Discussão um Eleitor com Xeleléu》.

㊸ Folhetos de Propaganda (プロパガンダの小冊子): 商業的宣伝, 政治的宣伝の両方を含んだカテゴリーである。従って前述の〈政治の小冊子〉と重複する部分がある。筆者が収集した小冊子のなかには、レコードや葉の宣伝, 労働組合や識字教育運動(MOBRAL)などの広報のための小冊子がある。José Francisco de Souza: 《Discos Voadores em Cordel》, Maxado Nordeste: 《Receitas de Cachaça com Folhas do Dr. Sabitudinho para Curar Toda Doença》, Severino José: 《Acidentes no Trabalho no Ramo da Construção》, José de Souza Campos: 《O Caminho para o Mobral》.

ロマンセ(romances)についてのマラニョンの記述は簡単であるが、次の4種類を挙げている。

- 1 Romances de Amor (愛のロマンセ)
- 2 Romances de Sofrimento (苦難のロマンセ)
- 3 Romances de Luta (戦いのロマンセ)
- 4 Romances de Príncipes, Fadas e Reinos Encantados (王侯貴族, 妖精, 夢の国のロマンセ)

〈愛〉のロマンセと〈苦難〉のロマンセは、いわゆる「メロドラマ」で、前者は男と女の関係が織りなす種々の葛藤を、後者は運命に翻弄されて苦しむ人間を描いた小冊子である。José Camelo de Melo: 《Pedrinho e Julinha》, José Bernardo da Silva: 《Historia de Mariana e o Capitão do Navio》, Expedito Sebastião da Silva: 《Os Sofrimentos de Selma (ou Fruto da Trição)》, José Costa Leite: 《Rogaciano e Dorotéia—Sofrimento, Amor, Aventuras》.

〈戦い〉のロマンセはマラニョンの説明によると、〈勇敢行為〉の小冊子が奥地を舞台とした戦いの物語であるならば、町を舞台とした物語であるとなっているが、筆者の収集した小冊子にはそうした区別はなく、両者の違いはページ数だけである。João Lucas Evangelista: 《A Vida de um Vaqueiro Valente ou a Vaquejada no Céu》,

Caitano Cosme da Silva: 《Jerônimo o Grande Herói do Sertão》.

〈王侯貴族、妖精、夢の国〉のロマンセはヨーロッパから移入された物語、あるいはそれらを範型にしてブラジルで新しく創作された物語である。〈シセロ神父〉の小冊子、〈ランピオン〉の小冊子とともに北東部の人々の好みをよく表わしているジャンルであると思われる。Severino Borges Silva: 《A Princesa Maricruz e o Cavaleiro do Ar》, Severino Milanês da Silva: 《Historia das Três Princesas Encatadas》, Leandro Gomes de Barros: 《O Principe e a Fada》.

南部のメシアニズム的宗教運動において、その〈聖戦〉の概念に影響を与えたといわれるシャルルマーニュの物語もこのジャンルに含められる。Leandro Gomes de Barros: 《A Prisão de Oliveiros》, João Martins de Athayde: 《A Batalha de Oliveiros com Ferrabraz》, Severino Gonçalves de Oliveiros: 《A Vitoria do Principe Roldão no Reino do Pensamento》 [FERREIRA 1979].

以上、マラニャンの「民間分類」の各カテゴリーを使って、リテラトゥーラ・デ・コルデルが採り上げる主要なテーマの概観を試みてみた。これらの内容的な側面をヨーロッパの民衆本と比較することにより、現代ブラジル北東部と近代ヨーロッパ、それぞれがもっている時代と地域に特有のテーマの違いを知ることおよびもう一方では民衆文学の普遍性を認識することができるかも知れない。

マラニャンの分類法は「民間分類」といっても、小冊子の生産・流通に携わる分類であった。これと対応して小冊子の消費者の分類も必要であろう。つまりなぜ、どのような目的で小冊子を読むのかという立場からの分類である。これは同時に作者がどのような意図のもとに、あるいは読者のどのような欲求を満足させるために書くかということに対応している。きわめて大雑把な観察を許していただくと、この観点からは次のような分類がなされることが予想される。

- ① 情報を得るための小冊子…いわゆる時事物、都市案内、著名人の伝記、恋愛のABCなど。
- ② 宗教的小冊子…聖人や聖母マリアの伝記、シセロ神父やダミアン師を主人公とした小冊子。予言や奇跡および祈禱文など宗教的実践と結びついた小冊子。
- ③ 娯楽的読物としての小冊子…ヨーロッパ伝来の伝統的物語およびそれらのヴァリエーション（例えば恋愛物、冒険物など）。笑い話。
- ④ 道徳的倫理的規範を確認するための小冊子…墮落、天罰の小冊子。あるいはそうした行動に対する忠告、あるいは作者の倫理観や哲学を述べた小冊子。

このようにして消費者の観点から眺めてみると、小冊子の内容あるいは消費者の意

図にはいわゆる実用的知識を獲得するという性格があまりない。唯一の例外や小冊子と同じ経路で生産、流通される暦 (almanaque) であるが、その他には、フランスのビブリオテック・ブルーに含まれていた医学的知識を与える本、料理や庭園の本、算術の本などは小冊子のなかに見られない。この事実が示している意味からリテラトゥーラ・デ・コルデルの性格やその限界というものを探ることは、これからの小冊子研究の課題であると思われる。

II への付記

本章では小冊子の全体的イメージを把握することを目的としてテーマ別分類によって小冊子の内容を概説した。そこで付記として数千冊にも及ぶ小冊子のレパートリーから一冊だけを取り出し、その語り口のほんの一端を紹介しよう。ここにその原文と大意訳を挙げたのは、ロドルフォ・C・カヴァルカンテ作の『ゼツーリオ・バルガスの天国訪問とその裁判』という小冊子である。マラニョンの分類によればこの小冊子は「ゼツーリオの小冊子」あるいは「時事の小冊子」に分類されるものである。発行年月日は記されていない。内容的には前半はバルガスの自殺の原因やその死によって生じたこの世の混乱をニュースとして伝えながら、バルガスの天国旅行記という形式が採られ、後半は彼の自殺の是非をめぐる審判の様子が描かれる。同じ作者には、同じ趣好によって書かれた『ランピオンの天国訪問』という小冊子がある。これはおそらくジョゼ・パチュコ作の『ランピオンの地獄訪問』という小冊子を意識して書かれたものである。『天国訪問』の小冊子においてテーマとなっているのは、ランピオンもある意味でそうであるが、国民的英雄として一般民衆には現在もお敬愛の対象であるバルガスの存在と彼の「自殺」という行為との矛盾を解決することである。というのはこの地方の民衆の大半の、なにより小冊子自体のイデオロギー的立場[荒井 1982]であるフォーク・カトリシズムからは自殺という行為は罪悪だからである。小冊子は、バルガスの行為をキリストの受難と比較しつつそれとの差違を明らかにしているが、結局はキリスト自身によって許される。こうしてバルガスは英雄としての面目を保ち、人々の心性のなかの矛盾は解決される。そればかりでなく前半において聖書の予言者たちによりメシアの1人に任ぜられているが、小冊子の終りにおいて再び、この地方の宗教的イデオロギーの最大の特徴であるメシアニズムのなかに位置づけられるのである。その意味でも『バルガスの天国訪問』という小冊子は典型的なものの一つであると言える。

A CHEGADA DE GETÚLIO VARGAS NO CÉU E O SEU JULGAMENTO

ゼツーリオの天国訪問

Quando Getúlio morreu
O manto da Natureza
Tingiu-se todo de luto
Mostrando maior tristeza
Soluçando pelo asto
Que brilhou com mais grandeza.

ゼツーリオが死んだ時
自然の外被の一切が
喪に染まり
大いなる悲しみを表わし
違大さによって輝く英雄のために泣いた。

De manhã o sol não quis
Demonstrar o seu fulgor
O mar sereno gemia
Num espetáculo de dor
E a lua no espaço
Perdeu tóda a sua côr.

Os homens aqui da terra
Perderam suas razões
Em desespêro gritavam
Como se fôsem leões
Pela perca do seu Líder
Amado pelas Nações.

Os operários diziam:
Morreu o meu protetor
Um outro Getúlio Vargas
Não nos manda o Criador
Rolavam em tódas das faces
O pranto do seu amor.

Enquanto isso o espaço
Turbado na escuridão
De Marte, Saturno a Vênus
Netuno, Capri, Plutão
Sentia a grande tragédia
De Getúlio nosso irmão.

Estava Jesus na Côte
Do Celeste Paraíso
Quando o Anjo São Miguel
Deu-lhe o doloroso aviso:
— Matou-se Getúlio Vargas
As vossas ordens preciso!

— Eu não mandei-te Miguel
Livrá-lo tirania
Do Deputado Lacerda
De Gregório e Companhia
Por que o deixaste sòzinho
Sofrendo tanta agonia?

— Senhor eu mandei os vossos
Mais sublimes mensageiros
Porém o ódio crescia
Pelos falsos brasileiros
Para intrigarem Getúlio
Com os planos traiçoeiros

朝、太陽はその輝きを示そうとせず、
おだやかな海は、苦しげな相貌で
うなっていた。
天空の月はその色を全く失った。

ここ地上では人々は、絶望に理性を
失い、
国民から愛された指導者を失って
まるでライオンのように叫んでいた。

労働者たちは言った：我らの擁護者
は死んだ。創造主はもう一人の
ゼツーリオ・バルガスをお与え下さない。
彼はどんな時にも愛の悲しみを説いた

一方、宇宙も暗闇のなかでざわめいていた。
火星、土星から金星、海王星、
山羊座、冥王星まで
我らの同志ゼツーリオの大きな悲劇を
痛切に感じていた。

天使、聖ミカエルがこの痛ましいニュースを
伝えた時、イエスは天の楽園の
王宮にいた。
「ゼツーリオ・バルガスは自殺しました。あな
たの御命令を必要とします。」

「いや、ミカエルよ、私はおまえに
グレゴリオとその仲間によってラセルダ議員の
圧迫から彼を解放せよと命じなかった。
なぜ彼を孤立させ、そのような大きな苦しみを
味わわせたのだ。」

「主よ、私はあなたの最も優れた使者たちを
送りました。
しかし、ゼツーリオを反逆分子と反目させる
ほど悪しきブラジル人のあいだで憎しみが
増していたのです。」

— De qualquer maneira eu quero.
 Getúlio no Paraíso
 Pois um sério julgamento
 Come êle fazer preciso
 Corra, vá ligeiro à terra
 Com São Jorge e São Narciso.

Vinte e quatro de agosto
 Daquele tristonho dia
 Com São Narciso e São Jorge
 São Miguel à terra descia
 E no Catete chegaram
 Numa hora mais sombria...

A espôsa de Getúlio
 Chorava dilacerada
 Dona Alzira como filha
 Dizia penalizada:
 — Morreste papi, porém,
 Tua memória é honrada!

Oswaldo Aranha gritava:
 — Getúlio Vargas morreu!
 Mataram meu grande amigo
 Que pelo povo sofreu
 Lutero também chorava
 São Miguel se entristeceu.

Enquanto o corpo estendido
 Se acanhava no caixão
 O espírito de Getúlio
 Estava em perturbação
 Vagando no infinito
 No vácuo da imensidão.

São Miguel chamou Getúlio
 Que estava tão aflito
 Como se estivesse em sonho
 Deu êle um tristonho grito
 E ao ver os mensageiros
 Ajoelhou-se contrito.

— Por que roubaste a vida
 Que o Criador te deu?
 Perguntou-lhe São Miguel
 Getúlio aí respondeu:
 — Matei-me pelo meu povo
 Que um dia me elegera!

「ともかくゼツーリオを天国へ呼びたい。
 そして彼に対して重大な審判を行なう
 必要がある。
 聖ジョージと聖ナルシスとともに
 地上へ急げ」

あの悲しい日、8月24日。
 聖ナルシス、聖ジョージとともに聖ミカエルは
 地上に降り、あの悲しみの時刻に
 カテーテ宮殿へ到着した。

ゼツーリオ夫人は嘆き悲しみ、
 娘のドナ・アルジラは、泣きながら
 言った「父は死にました。しかし
 父の思い出は名誉あるものです」

オスヴァルド・アラニーヤは大きな声で言った。
 「ゼツーリオは死んだ！ 人民のために
 苦しんだ我が偉大なる友は殺された。」
 リュテロもまた泣いた。
 聖ミカエルは悲しみにおそわれた。

ゼツーリオの肉体は我の中に横たわっていたが、
 その魂は錯乱して
 無辺広大な虚空をさまよっていた。

聖ミカエルはあまりの苦悩に夢遊状態に
 なっているゼツーリオに声をかけた。
 すると彼は悲しげな叫び声を上げ
 使者たちをみると罪を悔いてひざまづいた。

「なぜ主がお与え下さった生命を奪ったのだ」
 と聖ミカエルがたずねると、
 ゼツーリオは答えた。「かつて私を
 選んでくれた民衆のために自殺したのです。」

Mas não sabias que era
Um crime muito maior
Para salvar o teu povo
Fazendo um ato pior
Disse Getúlio: — Porém
Foi o que achei melhor!

Deixemos de discussão
Que isto não adianta
Se prepare para ir
À Mansão Celeste Santa
Onde Jesus lhe ouvirá
— Você aí se garanta!

Nos braços do Anjo foi
Getúlio Vargas levado
Quando por Marte passaram
Foi êle homenageado
Em Vênus quarenta Deusas
Cantaram: “MEU DOCE AMADO”.

Em Júpiter vinte segundos
Getúlio Vargas ficou
Para receber a faixa:
“MAIOR ASTRO QUE BRILHOU”
Em Saturno um grande almôco
A caravana aceitou.

Em Plutão disse Getúlio
Que ali não demorava
Recusou todos convites
Porque Hitler ali estava
Trabalhando de mineiro
Pelo crime que pagava.

Em “Capela” um remallete
De flôres celestiais
Recebeu Getúlio Vargas
Por dois grande Marenchais
Deodoro e Floriano
Que se tornaram imortais.

Na “Região do Amor”
Foi Getúlio recebido
Pelo grande Castro Alves
Onde é muito querido
No reino de Salomão
Também foi muito bem aplaudido!

「だが誤った行ないにより汝が民を救うことが
大きな罪であることを知らなかったのか」
ゼツーリオは言った。「しかしより良いこと
と思ったことなのでした。」

「無駄な議論は止めて、
聖なる天の王宮へ行く準備をせよ。
イエスが汝の話を聞くだろう。
おまえはそこで弁明せよ。」

天使の腕によってゼツーリオ・バルガスは
運ばれた。
火星を通るとき彼は敬意を表された。
金星は40人の女神が「我らの敬愛する人よ！」
と歌った。

木星では「輝ける大スター」と書いた横断幕の
歓迎を受けるために20秒間とどまった。
土星では一行は盛大な食事でもてなされた。

冥王星では、ゼツーリオはここにはとど
まりたくないと言い、あらゆる贈り物を断った。
というのもここではヒトラーがその罪を
償うために鉱夫として働いていたからである。

「礼拝堂」では、ゼツーリオ・バルガスは
不死となった二人の偉大なる将軍、
デオドロとフロリアーノから天の花束を
受けとった。

「愛の国」では、ゼツーリオは、
偉大なるカストロ・アルベスの出迎えを受けた。
大変な歓迎ぶりだった。
ソロモン王国でも、熱烈な拍手で迎えられた。

Estava o “ÁGUIA DE HAIA”
Ao lado de Salomão
Com Sócrates e Aristófanes
Hermes, Pitágoras, Platão
Fizeram um ode a Getúlio
Numa alegre saudação.

Na lua encontraram Adão
Moisés, David e Elias
Daniel e Rei Saul
Com Abraão e Isaiás
Recebeu Getúlio Vargas
O Diploma de Messias.

Duas horas mais ou menos
Viajou a Caravana
Enquanto a terra sofria
Essa passagem tirana
Getúlio chegava ao céu
Pela ajuda soberana.

Deixemos agora a terra
Num clima de confusão
Para falar de Getúlio
Na celestial mansão
Como foi seu julgamento
Vamos dar a descrição.

Estava Jesus no Trono
Já pronto para julgá-lo
São Libório, o Promotor,
Começou a acusá-lo
Enquanto a Virgem Santíssima
Chegou para advogá-lo.

Disse Libório:—Senhor
Getúlio zombou demais
No tempo da Ditadura
Encarcerou generais
Prendeu gente e matou gente
Como se fôssem animais.

Nossa Senhora sorriu
E disse:—Não acredito
Quem governa leva a fama
De tudo que é maldito
O que fizeram em seu nome
Jamais foi por êle escrito!

ソロモン王のかたわらには「ハイアの男」
(ルイ・バルボーザの換称)が、ソクラテス、
アリストファネス、ヘルメス、ピタゴラス、
プラトンとともにいた。
彼らは、楽しいあいさつとしてゼツーリオ
に対するオードをつくった。

月ではアダム、モーゼ、ダビデ、
エリア、サウル王それにアブラハム、
イザヤらと会い、
ゼツーリオはメシアの資格を受けた。

一行は二時間ばかり旅をした。
地上がこの酷い出来事に苦悩
している間に、ゼツーリオは神の
助けによって天国に到着した。

天国におけるゼツーリオについて
話しをするために、ここで混乱
状態にある地上はひとまず置こう。
彼の審判がいかなるものであったのかを
描写してみよう。

玉座にはイエスがゼツーリオを裁くべく
すでに席についており、
検事役聖リポリオが彼の罪状を
述べ始めていた。
一方、聖母マリアが彼の弁護のために
やって来た。

リポリオは言った。「主よ、ゼツーリオは
独裁時代にもさらに不屈きをしています。
將軍たちを投獄したり、人々を捕え
あたかも動物であるかのごとく
殺しています。」

聖母はほほえんで言った。「国を統治する者が
皆から悪人であるという世評を得たとは
信じられません。
人々が彼の名においてしてきた事柄は、かつて
一度も彼によって書かれていません。」

Libório continuou:

— Se Lacerda o condenava
Tinha razão para isso
Pois o Catete estava
Cercado de Pistoleiros
Que Getúlio contratava.

Defendeu Nossa Senhora
Dizendo:— Nunca Libório
Getúlio se confiava
Isto já está notório
De toda sua tragédia
O culpado foi Gregório!

— Mesmo assim, por que Getúlio
De uma vez que não devia
Não aguardou o Julgamento
Que a Oposição queria?
Seu suicídio provou
Qu'ele culpado sentia.

— Não acuse desta forma
Libório, que não convém
Getúlio Vergas sofreu
Como meu filho também
Para salvar os humildes
Sem ter ódio de ninguém.

Nisto Jesus ordenou
Que Getúlio demonstrasse
As razões do suicídio
Se de fato não provasse
Seria expulso do Céu
Antes que o dia findasse.

Disse Getúlio:— Senhor
Eu não sei vos descrever
A vergonha que sofri
Sem cousa alguma dever
Vós que descestes à terra
Devereis melhor saber.

— Não sabes que ninguém pode
Sua própria vida tirar?
Não vistes como sofri
Todo martírio sem par
Mas não roubei minha vida?
Tu devias me imitar!

リボリオは続けた。「ラセルダが彼を
糾弾したなら、それはごく当然のことでした。
なぜならカテテ宮殿は、ゼツーリオが雇った
殺し屋で囲まれていたからです。」

聖母は次のように言って弁護した。
「リボリオはゼツーリオを全く信用して
いないのです。彼の悲劇の全容は
すでに知られています。
罪人はグレゴリオです！」

「それはともかく、もしそうでないならば、
ゼツーリオはなぜ野党が望んだ
裁判を待たなかったのでしょうか。
彼の自殺は自分で罪を感じていた
ことを証明しています。」

「リボリオよ、そのような適切でない
形では告発できない。
ゼツーリオ・バルガスは私の息子と
同様、誰一人として憎まず、
人類を救おうとして苦しんだのだ。」

そこでイエスはゼツーリオに自殺の
理由を述べるよう命じた。
もし真実が明らかにされなければ、
彼は今日中に天から追い出される
であろうと。

ゼツーリオは言った。
「主よ私自身の被った不面目をあなたに
お話しするすべを知りません。
すべきことが何もなくとも、地上に
降りられたことのあるあなたには、よく
おわかりにちがひありません。」

「誰にも自分自身の命を奪うことは
できないことを知らなかったのか?
殉教者はすべて比べようもないほど
苦しんだということを知らなかったのか。
だが私は自殺をしなかった。
おまえは私を見習うべきだった。」

— Eu reconheço Senhor
Do erro que cometi
Mas u'a maldade humana
Como essa nunca vi
Indo até o sacrifício
Pelo meu povo morri.

— Eu te perdôo Getúlio
Porque fostes generoso
Lembraste dos pequeninos
Com teu modo caridoso
Mas voltarás ao Brasil
Por Ordem do Poderoso.

Se não fôsse o suicídio
Isto não acontecia
Hoje o povo brasileiro
Sofre a major agonia
E só tu podés livrá-lo
Com melhor sabedoria.

Assim Getúlio foi salvo
Do seu gesto delirante
E breve virá à Terra
Como um Chefe triunfante
Para ajudar o Poeta
RODOLEO C. CAVALCANTE.

「主よ、私は自分の犯した誤ちを
認めます。
しかし人間の悪事はかつてないほどで、
民衆のためのいけにえとして
私が死ぬところまで進んでいます。」

「ゼツーリオよ、私は汝を許そう。
なぜなら、寛大にも、汝が民衆を
慈愛に満ちた仕方だと思出した
からである。
だが、神の命により、汝はブラジル
にもどきなさい。」

「もし汝の自殺がなかったら、
今日ブラジル人が最高の苦しみを
味わうなどということはなかったであろう。
汝のみがよりすぐれた認識のもとに
彼らを解放できるであろう。」

かくしてゼツーリオは、その熱意のある
態度によって救われた。
彼はまもなく凱旋將軍のように地上に
戻って来るだろう。
Rodolfo C. Cavalcante という
詩人を救うために。

Ⅲ．小冊子の生産・流通・消費

I 節では小冊子を一冊選び、主としてその形態的側面について記述してみた。本節ではこの記述のなかで明らかになった小冊子のもっているいくつかの属性について、収集した小冊子全体の観察にもとづいて一般的な説明を行ないたい。リテラトゥーラ・デ・コルデルが「民衆本」として、現代ブラジルにおいても同時代的に存在する大衆文学の他の形態と区別される一つの理由は、その生産・流通・消費の過程が他の書物が経る過程と異なっているからである。II 節で示した小冊子の諸属性は小冊子が経過するいくつかの過程を反映している。そこで本節では後者について述べつつ前者を説明するという形をとりたい。

(1) 小冊子に関する人々の役割分化

小冊子の生産・流通・消費に携わる人々をその人が果たす作業の上から分けてみると、次のような役割が分別できる。

- | | | |
|----|---|-------------------------------------|
| 生産 | { | ① 作者 (詩人) autor, poeta popular |
| | | ② 表紙絵製作人 xilógrafo そのほか。 |
| | | ③ 印刷 (製本人) impressor, tipografo |
| | | ④ 出版人 editor |
| | | ⑤ 版權所有者 proprietário |
| 流通 | { | ⑥ 取次人 agente, folheteiro |
| | | ⑦ 販売人 vendedor, folheteiro |
| | | ⑧ 演者 (歌い手, 朗唱者) cantador de folheto |
| 消費 | { | ⑨ 観客 público, ouvinte |
| | | ⑩ 読者 público, leitor |

これらはこの小冊子に携わる人々の役割の最大限であるが、現実には、一人の人間がいくつかの役割を担っており、生産と流通の①から⑧までの役割をすべて一人の人間が担当するというのも少なくない。③から⑦までの印刷・出版・販売をすべて担当する商店を folhetaria という。II 節で取り挙げた小冊子の場合には作者、表紙の木版画家、印刷および出版人という三種の個人または組織がその生産に係っているが、作者は故人であり、木版画家は身内であるから、この小冊子は folhetaria の主導権の下につくられた小冊子ということになる。これに対し、例えば現在最も活躍中の作者の一人であり、前述の『人名・作品目録』に 193 編の小冊子名が挙げられているジョゼ・コスタ・レイチ (José Costa Leite 1927-) の場合には、ペルナンブコ州のコンダードに「A Voz da Poesia Nordestina」という印刷・出版・販売の店を持ち、木版画家として自分の小冊子の表紙絵を製作するばかりでなく、一枚刷りの版画の製作やいわゆる知識階級に属する詩人と共同で北東部を題材とした詩画集をリテラトゥーラ・デ・コルデルではない普通の形態の本として出版したりしている。このように小冊子の作者が複数の役割を担っている例は少なくなく、また生産においてばかりでなく、売りかつ演ずるという流通における役割をも果しているのが普通である。

(2) 作者と演者——口承文芸との連続性

今日われわれが経験している文学的コミュニケーションにおいては、作者と読者の

あいだには高度に発達した印刷・製本の技術とそれに係わる多くの人と組織、そしてその生産物である商品としての本、さらにその流通過程においても多くの人や組織が介在する。リテラトゥーラ・デ・コルデルもまた本であるから作者と読者とのあいだに同様な過程が存在することは必須である。だがその生産の出発点である作者と流通の最前線にいる販売人および演者のあいだの距離は非常に小さく、同一人物である場合も決して少なくない。その場合には単にそこに本があるというだけで、人々の前で即興的に創作し語る口承文芸の一つの形態がそのまま維持される。口承文芸との連続性はリテラトゥーラ・デ・コルデルの特徴として常に指摘されるところであるが、この連続性は歴史的な系譜関係ばかりでなく現時点における融合関係をも意味している。リテラトゥーラ・デ・コルデルの作者は小冊子のなかでは「autor」としてその名が記されることが慣わしとなっているが、普通は「poeta popular」と呼ばれている。

『人名・作品目録』では、口頭で歌ったり詩を作ったりする者を *cantador*、小冊子の作者を *poeta popular* と区別し、両者を兼ねる場合にはこれらを併記している。また後者の場合には作品目録が付けられている。要するにこれら二つは現代ブラジルの民衆文学における二つの伝統を意味している。*cantador* はヨーロッパ中世の吟遊詩人の伝統を継ぐと言われる。従ってその始まりはポルトガル人がブラジルに植民地を建設し始めた16世紀に溯ることができる。「吟遊詩人の末裔」という表現は、単にその活動の形態が似ていることによる比喻ではなく、そのレパトリーと詩的形式をブラジルの奥地人はヨーロッパの伝統的ロマンセから受け継いだのである。カスクード [CASCUDO 1970] はそうしたロマンセの例として “DONZELA TEODOLA”, “PRINCESA MAGALONA”, “IMPERATRIZ PORCINA” および “CARLOS MAGNO” の物語などを挙げている。時が経るにつれてブラジル独自のロマンセがつくられていくが、ヨーロッパから輸入された伝統的なジャンルはロマンセばかりでなく、前述のABCの形式の詩、祈禱詩などがある。

さて *cantador* の活動にはこうした伝統的な詩を記憶し語る型と即興的に詩を作って語るという型の二つがある。小冊子の作者も最初は（現在もその多くは）こうした人々のあいだから生まれたのであるが、彼らの活動もこれら二つの型に対応する型があった。すなわち伝統的な歌謡やロマンセを書き取るという型と新たなロマンセを創作したり、時事的社会的な主題による詩を創作して本にするという型の二つである。もちろん一人の作者でこの二つ型のいずれをも使える能力をもつ者もいた。そこで *cantador* および *poeta popular* であるための必要条件として、「歌(朗)唱能力」, 「読み書き能力」, 「伝承能力」, 「創作能力」という4つの能力が関与していることがわか

る。「歌(朗)唱能力」というのは、正確に言うと人々を前にしてビオラ (viola) とカラベカ (rabeca) といった楽器に合わせて歌う能力とそうした演奏なしに詩を朗唱する能力とを含んでいる。「読み書き能力」というのも文字を読む力と書く力とを分けて考える必要がある。書く力とは言うまでもなく小冊子を書く能力であるが、読む力というのは、小冊子を含め既に書かれたものを読む能力という意味と「読み書き能力」を前提とした知識人文化圏との接触が可能であるという意味とを含んでいる。これに対し「伝承能力」というのは、口頭伝承が行なわれる文化圏との接触をもち、そうした伝承を記憶あるいは学習し、文字による伝承を記憶あるいは学習し、文字によるか口頭によるかは別として何らかの方法によって再現できる態勢にあることを意味する。「創作能力」というのは口頭の場合には即興的に新しいものを演ずることができる能力を、文字文芸の場合には新しい作品が書けるということの意味する。

「伝承能力」と「創作能力」とは、cantador にも poeta popular にも関与する場合があるが、両者をはっきりと区別するのは「歌(朗)唱能力」と「書く能力」の有無であろう。cantador の伝統は現在も生きており、口承文芸においては前述の二つの型がそのまま維持されている。一方、小冊子の側から見た場合には、口承文芸との併存という条件のなかで、その誕生以来、次に掲げるような種々の型を生み出していった。

①「歌(朗)唱能力」、「読み書き能力」、「伝承能力」、「創作能力」のすべてを兼ね備えた者。小冊子の作者にとって一つの理想ではあるが、実際にこれらすべての能力を十全に発揮できるものはいない。

②「歌(朗)唱能力」、「読み書き能力」、「伝承能力」を備えているが「創作能力」をもたない者。初期の小冊子の場合に存在した型である。というのは読者の伝統的な詩や物語が優れた詩人によっていったん小冊子のレパートリーに収められてしまえば、作者としては活躍する余地はなくなってしまうからであり、リテラトゥーラ・デ・コルデルの場合にはまさにそのような歴史的経過を辿ったからである。

③「歌(朗)唱能力」はもっていないが、「伝承能力」、「創作能力」を兼ね備え、しかも「読み書き能力」をもっている者。現代的な意味での作者に近いが、伝統的なレパートリーをも伝承するという意味で異なっている。小冊子の最初にして最大の作者と言われているレアンドロ・ゴメス・デ・バロス (Leandro Gomes de Barros 1865-1918) はこの型の作者であった。彼の作品目録 [BATISTA 1971] を見ると、ヨーロッパ伝来の伝統的物語 (“Batalha de Oliveiros com Ferrabraz”, “História da donzella Theodora”, “História do soldado jogador”, “História de Pedro Cem” その

他)、彼の創作によるロマンセ (“A Fora do Amor ou Alonso e Marina” “História de João da Cruz”, “O Príncipe e a Fada” その他)、当時としては時事的ニュースの物語化であったアントーニオ・シルビーノを主人公とした小冊子 (“Antonio Silvino no Jury”, “Antonio Silvino o Rei dos cangaceiros” その他)、世相諷刺 (“Dinheiro” その他)と、その能力を駆使して今日のリテラトゥーラ・デ・コルデルのレパトリーをなしている多くの分野で傑作を残している。

④「創作能力」には恵まれていないが、「歌(朗)唱能力」、「伝承能力」、それに「読み書き能力」のうち少なくとも「読む力」を備えている者。この型の間人はどちらかと言えば *cantador* の系列に属するが、彼が小冊子と係わり、これを読んだり歌ったりする時、*cantador de folheto* と呼ばれる。③に挙げたレアンドロの小冊子には、このような人々の働きにより口承文芸化、すなわち文字文芸の民俗化現象 (*folklorization*) が起きている。この役割を果たす者は、作者自身 (この場合は①あるいは②の型になる) よりむしろ、小冊子の取次や販売を行なう *folheteiro* と呼ばれる人々のなかに多い。

⑤ 最後に「読み書き能力」と「創作能力」を備えているが、「歌(朗)唱能力」および「伝承能力」はもっていない、あるいはそうした能力を発揮しないという型が挙げられる。この型は我々が考える「作家」のイメージに最も近い。また小冊子の主題に関する時代的趨勢は、伝統的物語から創作された物語、テレビ小説、時事的ニュースなどに移っている。「読み書き能力」には小冊子の作者のなかでもかなり幅があるようで、小冊子の生産・流通・消費はあくまで民衆文化圏の範囲を越えていないが、作者のなかには民衆文化圏に生まれそして生きている者と知識人文化圏との併存を意識している者とがいる。当然のことであるが、小冊子を書くためにはある程度の教育は必要であったとしても、高等教育を受けた者が必ずしもリテラトゥーラ・デ・コルデルの優れた作者ではない。

以上に挙げた①から⑤までの型のうち、④と⑤の型が最も多いと思われる。作者のなかには小冊子を読んだり演説をしたりする者もいるが、それが芸能の域にまで達している者は多くない。④と⑤は常に結びついているわけではなく、小冊子が通りの売店にただ並べられているだけという場合もある。④と⑤は分業という形態をとりながら、リテラトゥーラ・デ・コルデルのなかで緩やかな結合をかたちづくっているのである。

(3) リテラトゥーラ・デ・コルデルの韻律構造

小冊子はその主題やそれに携わる人のタイプにおいて口承文芸との連続性をもつことは充分ではないが既に述べた。この連続性はこれらのほかにも小冊子における叙述の基本となる詩句の韻律構造にも見い出すことができる。伝統的な口頭詩で用いられた詩法が小冊子でも受け継がれているのである。そこで本節の主旨からは少し外れるが、この連続性を示すために、まず口頭詩にはどのような形式があるか、その名称のみを列挙し、次に小冊子がそれらのなかで頻繁に用いる形式について各々簡単に説明を加えよう。

即興的に歌われる民衆的な詩の詩法として『人名・作品目録』はそのまえがき [9-52] のなかで次のようなものを挙げている。

- Quadra
- Sextilha
- Oitava Antiga
- Décima
- Mourão de 5 Pés
- Mourão de 6 Pés
- Mourão de 7 Pés
- Mourão de Você Cail
- Martelo Agalopado
- Galope Gabinete
- Galope à Beira-Mar
- Oitava em Quadrão ou Oito Pés em Quadrão
- Quadrão Mineiro
- Quadrão a Beira-Mar
- Dez Pés a Quadrão
- Quadrão Grande ou Vai-e-Vem
- Meia Quadra
- Mourão Voltado
- Parcela ou (Carretilha) Miudinha
- Galope Alagoano
- Toada Alagoano
- Gemedeira

- Oitavão Rebatido
- Dez de Queixo Caído
- Septilha
- Trava-Língua
- Desmancha
- Taboada
- Gabinete Repetido
- Mote
- Ligeira

リテラトゥーラ・デ・コルデルではこれらすべての詩法が用いられているわけではない。このなかで小冊子が頻繁に用いる主なものは、

- Sextilha
- Décima
- Septilha

で、そのほかにも

- Martelo Agalopado
- Galope à Beira-Mar

などが用いられる。例を挙げて簡単に説明すると、

〈sextilha〉小冊子で最もよく用いられる形式である。各詩句が7音節あるいは10音節から成り、各詩節が XAXAXA (Xは自由韻、同じアルファベットは同一の音を表わす) という脚韻構造をもつ6つの詩句から構成される形式。すなわち2行目、4行目、6行目に脚韻が置かれる。

Esta lampada tinha um genio	...X
que obedecia a ela	...A
aparecia vexado	...X
quando se apertava nela	...A
pronto pra obedecer	...X
a quem fosse dono dela	...A

(Antonio Gonçalves: 《A Lâmpada de Aladim》, 32 p. 第12連)

Pedro Cem era o mais rico	...X
que nasceu em Portugal	...A

Sua fama enchia o mundo	...X
seu nome andava em geral	...A
não casou-se com rainha	...X
por não ter sangue real	...A

(João Martins de Athayde: 《A Vida de Pedro Cem》, 16 p. 第2連)

〈Décima〉 各詩句が7音節あるいは10音節から成り、各詩節が ABBAACCCDDC あるいは ABABCCDCC という脚韻構造をもつ10の詩句から構成される形式。

Carlos Magno quando ouviu	...A
a resposta de Roldão	...B
se encheu de tanta paixão	...B
que um ferro lhe sacudiu	...A
Roldão quando olhou que viu	...A
o sangue dele decer	...C
não pode mais se conter	...C
se armou com tal furor	...D
que não fai ao imperador	...D
por Ricarte se interver	...C

(João Martins de Athayde: 《A Batalha de Oliveiros com Ferrabraz》, 32 p. 第15連)

〈septilha〉 各詩句が7音節から成り、各詩節が XAXABBA という脚韻構造をもつ7つの詩句から構成される形式。

Satanás com esse incêndio	...X
tocou um búzio chamando	...A
correram todos os negros	...X
os que estavam brigando	...A
Lampião pegou olhar	...B
não viu mais com quem brigar	...B
também foi se retirando	...A

(José Pacheco: A Chegada de Lampião no Inferno, 8 p. 第27連)

〈Martelo Agalopado〉 各詩句が10音節から成り、各詩節が ABBAACCCDDC と

いう脚韻構造をもつ10の詩句から構成される形式。小冊子では主に〈歌競べ〉(peleja)で用いられる。

Sou mineiro, com orgulho falo “uai”	...A
Também gosto de falar “trem bom”	...B
Nunca cantei fora do meu tom	...B
Comigo o repente sempre vai	...A
O bom cantador se segura e não cai	...A
Sou fogo quando canto um martelo	...C
E sempre ganho qualquer duelo	...C
E vou cantando até o sol raiar	...D
Meu prazer é cantando exaltar	...D
Ésse grande Brasil verde e amarelo	...C

(《Peleja de Téo Azevedo com Jotabarros em Martelo》, 7 p. 第5連)

〈Galope à Beira-Mar〉各詩句が11音節から成り、各詩節が ABBAACDDC という脚韻構造をもつ10の詩句から構成される形式。“.....beira do mar” という繰り返し句を一つの詩節のなかに入れることが義務となっている。同じく〈歌競べ〉の小冊子のなかで出てくる。

Pra Dr. Liêdo lá vai Beira-Mar	...A
onde vê-se meninas tudo pinotando	...B
o maiô ligandiho chega fica monstrando	...B
o grosso da perna porque não tem saia	...A
é gostoso se vê moça na gandaia	...A
mais o namorado tudo a pinotar	...C
eu fico de parte somente a olhar	...C
negro comendo lagost a, aratú	...D
dando beijo em mulher e tomando Pitú	...D
no banho gostoso da beira do mar	...C

(José Pontual: 《2ª Peleja de José Pontual com Vicente Emiliano》, 8 p. 第29連)

このような詩節の形式ばかりでなく、前述の ABC のような詩節間の組み合わせ方、あるいは desafio もまた小冊子が口承文芸と共有している詩法である。

(4) 表紙絵製作者——表紙および裏表紙

小冊子生産において創作的な役割を果たす第二のカテゴリーは表紙絵の製作者である。小冊子の表紙は、一般の書物に比較すれば粗末なものであるが、それなりに工夫がなされている。J・ルイテンは自分が収集した4000冊余りの小冊子への観察に基づいて、表紙に用いられた技法の種類を次の4つに分類している [LUYTEN 1979]。

- ① 活字 (写真5)
- ② 線画凸版 (写真6)
- ③ 写真版 (写真7, 8)
- ④ 木版 (写真9)

これら4つの技法は単独に用いられるばかりでなく、組み合わせられた形でも用いられる。このなかで主流を占めているのは木版画であるが、いずれの技法も現在発行されている小冊子のなかに見出すことができる。だが木版画については何人かの研究者がその図像学的あるいは美的な価値に注目しているが、その他の技法についてはルイテンの論考を除いては言及する者さえほとんどいない。ルイテンの説明に関しても筆者自身はそのすべての論述の真偽を再確認することができなかったので、筆者が確

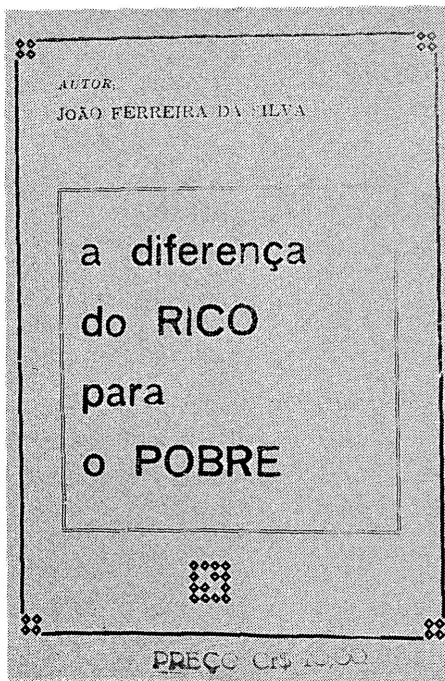


写真5

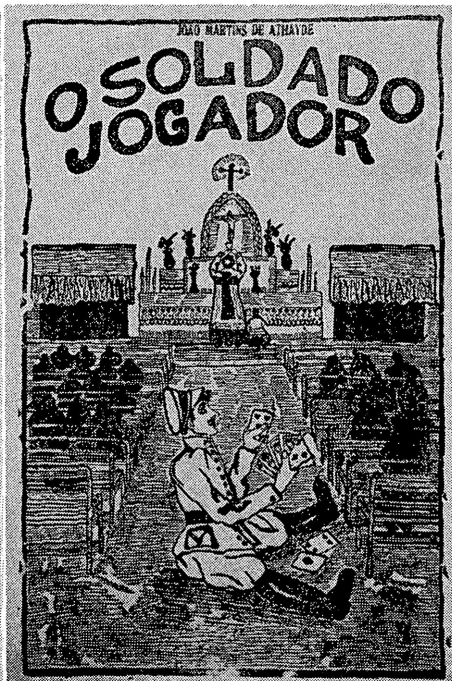


写真6



写真7



写真8



写真9

認できた事項についてのみルイテンの説明を参照しながら表紙絵の各技法について解説しよう。

〈活字〉 表紙に本文の題名と作者名だけを活字で印刷したもので、年代の古い小冊子に多く見られる。

〈線画凸版〉 手書きの線画を製版して印刷したもの。比率からすればそれほど多くないが、1930年代から1950年代にかけての小冊子により多く現われる。ルイテンの説明によるとこの時代には写真版が好まれていたが使いたい写真が手に入らない時にやむをえず線画で代用したといわれる。

〈写真版〉 今日でも頻繁に用いられる表紙絵の技法で、その使用法は小冊子の

特定のジャンルと結びついている。すなわち表紙に写真が用いられるのは、大部分が時事物、そして *romance* とか *historia* と呼ばれるページ数の多い小冊子の場合である。使用される写真は雑誌から転載されたもので、時事物の場合には写真7のエルビス・プレスリーの死を報道した小冊子であれば彼のステージ写真というように写真と本文のあいだに斉一性があるが、*romance* や *historia* の場合には、恋愛物ならば恋愛映画の男優と女優が並んで写っている写真、牧童を主人公とした小冊子であればウェスタン映画の俳優の写真が用いられるといった程度の一致しかなく、絵がもっているその他の指示的 (denotative) あるいは共示的 (connotative) な要素、顔立ちとか衣裳、およびそれらによって表わされる地域的・社会的・時代的屬性は全く無視されている。従って同一の写真が同じジャンルの全く異なった本文をもつ小冊子に適用される可能性は十分ある。そのほかに写真が用いられる場合として、忠告の小冊子や〈歌競べ〉の小冊子で作者や演者の写真が表紙になることもある。

〈木版画〉小冊子の表紙絵として現在最も多く用いられ、リテラトゥーラ・デ・コルデルの最も人々を魅きつける特徴となっているのが木版画 (xilogravura) である。民衆的小冊子の表紙絵としての木版画というのは、ヨーロッパにも先例がありそれほど珍しくないが、同じ技法が現代ブラジルの北東部の人々の心性世界を描くリテラトゥーラ・デ・コルデルの表紙絵として用いられた時、その形象とその背後にある思想に対して、ヨーロッパのものとは異なる図像学的興味を我々に与える。

木版の技法それ自体は、リテラトゥーラ・デ・コルデルの誕生以前、19世紀の初頭には定期刊行物の挿絵として、あるいはランプや地図などに盛んに使われ、ブラジルの図像的な集合表象を研究するための重要な資料となっている [FERREIRA 1976]。北東部における木版画はそれらとは別に小冊子の発生とともに生まれ発展してきた。

『北東部の木版画家たち』[CASA DE RUI BARBOSA 1977d] には12人の木版画家の名前が挙げられているが、このうち小冊子の作者を兼ねている者は7人、その他の者は木版画のみを専門としているがそのうち4人が小冊子の表紙を作っており、小冊子に関係していない作家は1人だけである。その他にも無名の木版画家がかなり多く小冊子の表紙絵の製作に関係していると思われる。歴史的に見て、北東部の木版画は現在が最も盛んな時期のようである。これらの木版画家は小冊子と離れた制作活動をしているが、ヨーロッパ近世における民衆本 (例えば *bibliothèque bleue*) とエピナールの民衆版画の関係のようにそれぞれが民衆文化圏のなかで独自のジャンルを形成しかつ産業として成立するほどの地位を築いておらず、良くも悪くも小冊子とは不即不離の関係にある。

次に表紙との関連で裏表紙にも触れておこう。Ⅱ節では、その裏表紙から出版社と取次人の住所を知り、その流通圏についての情報を得たが、裏表紙に印刷される事柄はそれ以上にさまざまな内容をもっており、本文と同じように小冊子とその作者についての重要な情報源となっている。この領域については合衆国の小冊子研究家キュランによって既に要領よくまとめられているので、その要点を紹介するだけに留めたい [CURRAN 1972]。

裏表紙の内容は、キュランによると次の9つのタイプがある。

① 作者であると同時に出版人である者が自分の小冊子で現在入手可能なものについて広告をする。

② 商品の広告。

③ 選挙キャンペーンにおける立候補者、あるいは政府や地方自治体から委託された政治的プロパガンダ。前述のように小冊子全体が商業的宣伝や政治的プロパガンダに利用されることもある。

④ シセロ神父に対する祈禱の文章 (oração)。筆者が1978年にジュアゼイロ・ド・ノルテで観察した例によると、〈シセロ神父〉の小冊子はその表紙に神父の写真あるいは木版の像が描かれているために、現在も神父に対する信仰を持ち続けているこの町の人々は、祭壇の中央において聖像の代用として用いている場合もあった。祈禱文も含め、読み物としてではない護符としての小冊子の使用法を示している。

⑤ 他の作者への賛辞あるいは弔詞。

⑥ 小冊子の出版人のうち何人かは、小冊子と同じ形で占星術や暦の本を出版をしているが、これらの本の宣伝にも裏表紙が用いられる。

⑦ 作者の経歴あるいは伝記。

⑧ 作者同志の集まりや作者がつくっている組織 (ロドルフォ・コエーリエ・カバールカンテラ有志は、ORDEM BRASILEIRA DOS POETAS DA LITERATURA DE CORDEL を作り活動している) への新入会員の紹介や会議の通知など。

⑨ 小冊子の著作権の所在の確認、盗用についての抗議など。

キュランが挙げている以上の9項目のほかにも

⑩ 短い詩や俗謡の歌詞

などが印刷される場合がある。

(5) 印刷・製本者

小冊子の印刷に用いられるのは手引きの活版印刷機であるが、小冊子における印刷

機を誰が所有するかという問題に帰する。そのあり方には3つのタイプがある。第一は、作者自身が印刷機をもち出版人となるタイプ、第二は、出版人が中心となって専属の作者あるいは作者から版權を買って印刷・出版を行なうタイプ、第三は、自分では印刷機をもたないが、印刷機をもつ友人や、小冊子の印刷のみを専門にしている者ではない印刷人にこの過程だけを依頼するタイプである。リテラトゥーラ・デ・コルデルの印刷所のなかは第一のタイプであれば作者（詩人）を中心として一種の徒弟関係が形成されている。従ってそこに働く者はかなり幼い子供もおり、このなかから将来の作者あるいは販売人が出てくる場合も多い。

製本の方法は、中とじや接着を用いてとじる方法を用いるが、いずれも簡単なやり方で、なかには紙を四つ折りしただけの小冊子もある。

(6) 出版人と版權所有者

小冊子の出版人のタイプはこれまでも述べたように、大別すると、作者自身が出版人である場合と、自分が作者である場合もあるがそのほかにも何人かの作者から版權を買ったり専属の作者を雇って出版を行なっている出版人の場合がある。いくつか例を挙げると、前のタイプには、José Costa Leite の *A Voz da Poesia Nordestina* や Rodolfo Coelho Cavalcante の *A Casa do Trovador* があり、後のタイプには、ジュアゼイロ・ド・ノルテにある *Grafica Literatura de Cordel* や *Folheteria e Tipografia Casa dos Horóscopos* がある。これは小冊子の出版権や著作権の問題と関連している。無断出版や他人の作品の横取りを防ぐために、前のタイプの場合には、表紙にまず「AUTOR:…」と作者を明示した上で、「Direitora de Propriedade (あるいは *direitos autorais*) reservados legalmente」と明記し、後のタイプの場合には、「Editor Proprietário」と明記される。また前述のような小冊子の裏表紙で警告をしたりもする。ところが後者の場合出版権と作者の権利とのあいだで問題が生ずる。本来ならば版權を所有している出版人の名と並んで、作者名も明記すべきであり、今日出版されている小冊子の大部分はそうになっている。だが以前の小冊子のなかには、作者名が記されていないか、あるいはその作品を買った出版人を作者としてしまう例があり、小冊子研究家に対し真の作者の確定という課題を提出している。出版権や著作権の侵害という問題は、リテラトゥーラ・デ・コルデルが口承文芸の性格を未だ残しているというところに理由の一つを求めることができるかも知れない。この問題が論じられる時に常に引き合いに出されるのが、小冊子最大の詩人であるとされるレアンドロ・ゴメス・デ・パロス（前述）と同じく優れた詩人であるとされるジ

ョアン・マルチンス・デス・アタイド(João Martins des Athayde 1880-1959) および Grafica Literatura de Cordel の創立者ジョゼ・ベルナルド・ダ・シルバ(José Bernardo da Silva 1901-1972) の関係である。レアンドロは1918年に死んでいるが、1921年にその未亡人はレアンドロの全作品の著作権を60万レルでアタイドに売った。以降、1950年にジョゼ・ベルナルド・ダ・シルバに自分の所有していたすべての小冊子の権利を売るまでの30年間、アタイドは北東部最大の出版元の経営者となった。この時期は小冊子発行の全盛期に当る。アタイドが自分の出版する小冊子の版權を護るために「editor proprietário」として自分の名を小冊子の表紙に印刷した。それだけであったら何の差し支えはなかったが、同時に作者名を削除し、本文最終連を構成する各詩句の始まりの文字をつなげると作者名がわかる *acróstico* の使用を禁じたのである。これにさらに輪をかけたのがアタイドから権利を譲り受けたジョゼ・ベルナルド・ダ・シルバで、彼はアタイドと同じく *editor proprietário* として自分の名を記したうえに、さらにその傍にアタイドの名を記したのである。その結果、レアンドロの作品ばかりでなく、アタイドに著作権を売った何人かの作品の作者がアタイドに帰せられることになってしまったのである。

著作権をめぐる食い違いは、知識人文化圏と民衆文化圏とのあいだで起きている。民衆文化圏の内部ではすでに述べたように著作権を確立する努力がなされている。ところが知識人文化圏の側は、リテラトゥーラ・デ・コルデルも他の口頭伝承と同様に匿名の芸術であり、誰もが自分の発想の源泉として利用できると考えてしまう傾向をもっている。リテラトゥーラ・デ・コルデルを評価し、これに対する理解の深い者ほどそういう傾向にある [MAURÍCIO 1978; SLATER 1979]。

(7) 観客と読者

リテラトゥーラ・デ・コルデルに関する研究は、ヨーロッパの民衆本の諸研究と比較して、かなり進んでいると思われるが、それらに比べて遅れているのが読者論である。筆者も読者について観察・調査する機会を得なかった。以下、気のついた事柄のみを記すと、小冊子が他の本の形態と異なるのは、その享受者に観客と読者の二種類があることである。これは、(2) で述べた作者と演者の区別に相応するカテゴリーである。作者-読者の関係はいわゆる文学的コミュニケーションにおいて普通の形態であり、間接的で1対1の関係である。これに対し演者と観客の関係は直接的で、1あるいは2対多の関係である。小冊子は台に並べられたり、あるいはその名称の由来どおり紐に吊されて売られるばかりでなく、公設市場や定期市で読み上げられ歌われた

りしながらも売られる。前者のような売り方の場合、その顧客には文字の読める読者しか想定できないが、後者のような販売人の周りに集まる人々のなかには文字の読めない者も含まれている。こういう人々が小冊子を買うか買わないかということは実際に調査してみなければわからないことであるが、その享受者のなかに文字の読めない者が含まれていることは確かであり、それは本によるコミュニケーションのあり方として独特のものであると言ってもよいであろう。ちなみに小冊子の書き出しの詩句には、「(Atenção caros) leitores」とともに「(Agora caros) ouvintes」という呼びかけ (address) も用いられることがある。

おわりに——民衆本の比較研究へ——

リテラトゥーラ・デ・コルデルに関する研究の歴史は、本研究ノートを作成するにあたって参照した文献からもわかるとおり、思ったより古く、成果の蓄積がなされている。民衆文学の研究は、今日、ヨーロッパおよびアメリカ合衆国で盛んになっており、ブラジルにおける近年の小冊子研究はそうした欧米の研究動向に刺激されたものも少なくない。しかしその研究の歴史を見てみると、小冊子研究の基礎的な部分を推進している人々はそうした動向とは別に独自に研究を始めたか、あるいは少なくとも別の研究動向に属している。実際にヨーロッパ諸国とブラジルの民衆文学研究史を比較してみると少なくともここ30年のあいだにおいてはブラジルがヨーロッパに10年ほど先んじて研究を始めているようである。

研究史の概略を辿ってみると、ヨーロッパではすでに19世紀において民衆本に関する C. ニザールの古典的研究が現われている [Nisard 1864 (初版は 1854)]。この年代にはブラジルにおいてリテラトゥーラ・デ・コルデルは未だ誕生していなかった。とはいえヨーロッパにおいてもまたブラジルにおいても民衆本の研究が本格的に始まるのは1950年代以降のことである。まずブラジルでは1953年に民俗学者であるカマラ・カスクード (Luís da Câmara Cascudo 1899-) が『民衆の五冊の書物』 (“Cinco Livros do Povo”) が出版されたのを皮切りに1959年にはレナート・C・カンボス (Renato Carneiro Campos) の『民衆詩人のイデオロギー』のような研究書が、1961年には、小冊子研究の基礎的作業である『韻文の民衆文学—カタログ編第1巻』 (“Literatura Popular em Verso. CATÁLOGO Tomo I) が小冊子の研究センターを設けているリオ・デ・ジャネイロのカーサ・デ・ルイ・バルボーザから上梓されている。1950年代、ヨーロッパでもフランスではブロション [Brochon 1954]、イギリスで

はブラグデン [BLAGDEN 1958] などの先駆的業績が現われているが一般の関心を引くまでには至らなかった。この時期ヨーロッパでは、グラムシの大衆文学論, R・ホガート [HOGGART 1957] の識字能力と労働者階級の文学の研究, R・エスカルピの文学の社会学 [ESCAPIT 1958], I・ワットの読者論 [WATT 1957] などが現われて、大衆文学の社会学的な研究の隆盛があった。だがヨーロッパで固有の意味での民衆本に関する本格的な研究が現われたのは、1960年代になってからだと思われる。1964年に前述のR・マンドルーの著作が、続いてフランスではG・ボレームのビブリオテック・ブルーおよび民衆暦本の研究 [BOLLÈME 1965, 1969] が現われ、スペインでは、リテラトゥーラ・デ・コルデルと直接の系統関係をもつスペインの民衆本についてのバロハ [BAROJA 1969] の著作が出されるに至った。1970年代にはイギリス, フランス, スペインそしてブラジルで民衆本の研究が一般の人々の関心を引くほどの大きな主題の一つとなった。そうした関心の背景には、1960年代に現われた民衆文芸に対する種々の新しいアプローチによる方法的関心があったと思われる。例えばA・B・ロード [LORD 1965] が提起した文字文芸に保持された口承文芸的個性という視点, V・プロップの民話の形態学あるいは記号学的アプローチ [PROPP 1970], J・グーディによる識字能力が人類にもたらす種々の影響の研究などが挙げられる。そのほかにもいわゆる文学書に対する研究ばかりでなくN・エリアス [エリアス 1977, 1978] が礼儀作法の本を用いて行なったような、「日常生活のなかの書物」すなわち教科書, 通俗医学書, 料理の本, 造園術の本, 暦, 旅行案内などいわゆる実用書と呼ばれる本から、それが用いられた時代の人々の心的および物質的な生活を再構成しようという試みも行なわれている。

そのなかでブラジル北東部の民衆本の研究の意味はどこにあるのだろうかということ最後に述べれば、この民衆本の一形態は、過去のものではなく現在も出版されているというところに研究対象としての重要性があるといえる。ロードにおけるホメロスの作品と東欧の吟遊詩人の関係, P・ツムツール (Paul Zumthor) における中世文芸と吟遊詩人の関係の研究が類推または歴史的再構成であるのに対して、リテラトゥーラ・デ・コルデルの場合には実際に生きた関係としてある。同じように識字率と「民衆本」の関係, コミュニケーションの体系のなかで吟遊詩人やブラジルの民衆詩人が果たしている媒介的な役割の意味, 最終的には「民衆本」の定義の問題など, リテラトゥーラ・デ・コルデルの研究が民衆本の比較研究において果たす役割は決して小さくないと思われる。本研究ノートでは、この研究対象のもつ豊かさのほんの一面を覗いたのみである。

謝 辞

この研究ノートの執筆にあたっては、国立民族学博物館の友枝啓泰、山本紀夫、煎本孝の諸氏に草稿の段階で読んでいただき有益な御忠告を頂くことができた。諸先生方に厚く謝意を述べたい。ただ筆者自身の調査の現段階では貴重な御忠告を十分に生かすことのできなかった点が多々あることをお断り申し上げておきたい。

本稿は、ブラジル北東部の民衆本について、同地域のメシア主義的宗教運動との関連で、民族学博物館における共同研究「土着主義的宗教運動の基礎的比較研究」（代表者 友枝啓泰）において報告を行なったものに手を加えたものである。以来、筆者の研究を励まし本稿の執筆を勧めていただいた中牧弘允氏にあらためて感謝の意を述べたい。

文 献

荒井芳廣

1979 「フォークロアとコミュニケーション——情報交換と思想表現の民衆的回路」山中一郎編『社会学シンポジウム』文教書院, pp. 124-142。

1982 「民衆的小冊子におけるメシアニズム——ブラジル北東部の宗教的イデオロギー」中牧弘允編『神々の相克』新泉社, pp. 191-221。

ALMEIDA, Augusto F. de and J. A. SOBRINHO

1978 *Dicionário Bio-Bibliográfico de Repentistas e Poeta de Bancada*. 2 vols. Universidade Federal da Paraíba.

AZEVEDO, Carlos Alberto

1973 O Heroico e o Messiânico na Literatura de Cordel III. *Revista de Cultura* 68(4): 51-54.

BAROJA, Julio Caro

1969 *Ensayo sobre la Literatura de Cordel*. Editorial Revista de Occidente.

BATISTA, Sebastião Nunes

1971 *Bibliografia Prévia de Leandro Gomes de Barros*. Biblioteca Nacional.

1977 *Antologia da Literatura de Cordel*. Shell Brasil S.A.

BELTRÃO, Luiz

1971 *Comunicação e Folclore*. Edições Melhoramentos.

BENJAMIN, Roberto E. Câmara

1970 A Religião nos Folhetos Populares. *Revista de Cultura Vozes* 64(8): 609-616.

BERRY, Paul

1975 Literacy and the Question of Creole. In Vera Rubin & Richard P. Schaedel (eds.), *The Haitian Potencial—Research and Resources of Haiti*, Teachers College Press, pp. 83-113.

BLAGDEN, Cyprian

1958 The Distribution of Almanacks in the Second Half of the Seventeenth Century. *Papers of the Bibliographical Society of Virginia* 11: 107-116.

BOLLÈME, Geneviève

1965 La Littérature Populaire et de Colportage. *Livre et Société dans la France du XVIII^e siècle*. Tom. I: 61-92.

1969 *Les Almanachs Populaires aux XVII^e et XVIII^e siècles. Essai d'Histoire Sociale*. Mouton.

BROCHON, Pierre

1954 *Les Livres de Colportage en France depuis le XV^e siècle, sa littérature, ses lectures*. Gründ.

CAMPOS, Renato Carneiro

1977 *Ideologia dos Poetas Populares*. IJNPS (1^a Edição 1957).

CANTEL, Raymond

- 1965 De la Sicilie au Texas, au Mexique et au Brésil, Quelques Complaintes sur la Mort de John F. Kennedy. *Caravelle: Cahiers du Monde Hispanique et Luso-Brasiliien* 10: 44-60.
 1970 Les Propheties dans la Litterature Populaire du Nordeste. *Caravelle: Cahiers du Monde Hispanique et Luso-Brasiliien* 15: 57-72.
 1972 *Temas da Atualidade na Literatura de Cordel*. Escola de Comunicações e Artes, Universidade de São Paulo.

CASA DE RUI BARBOSA

- 1961 *Literatura Popular em Verso*. *Catálogo Tomo I*.
 1964 *Literatura Popular em Verso*. *Antologia Tomo I*.
 1973 *Literatura Popular em Verso*. *Estudos*. Tomo I.
 1977a *Literatura Popular em Verso*. *Antologia*. Tomo II. (Leandro Gomes de Barros)
 1977b *Literatura Popular em Verso*. *Antologia*. Tomo III. (Leandro Gomes de Barros)
 1977c *Literatura Popular em Verso*. *Antologia*. Tomo IV. (Franciscodas Chagas Batista)
 1977d *Xilografos Nordestinos*.

CASUDO, Luis da Câmara

- 1953 *Cinco Livros do Povo*. José Olympio.
 1970 *Vaqueiros e Cantadores*. Edições de Ouro. (1ª Edição 1939)
 1972 *Dicionário do Folclore Brasileiro*. 2vols. Ministério da Educação e Cultura.

CEARÁ, SECRETARIA DE CULTURA, DESPORTO E PROMOÇÃO SOCIAL

- 1978 *Antologia da Literatura de Cordel*.

CERTEAU, Michel de.

- 1980 *La Culture au pluriel*. Christian Bourgois.

CURRAN, Mark J.

- 1972 A "Página Editorial" do Poeta Popular. *Revista Brasileira de Folclore* XII (32): 5-16.
 1973 *A Literatura de Cordel*. Universidade Federal de Pernambuco.

DIEGUES Júnior, Manuel

- 1973 Ciclos Temáticos na Literatura de Cordel. In: Casa de Rui Barbosa, *Literatura Popular em Verso*. *Estudos*. Tomo I.
 1975 *Literatura de Cordel*. Cadernos de Folclore No. 2, Ministério da Educação e Cultura.

エリアス・ノルベルト

- 1977 『文明化の過程(上)——ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷——』赤井慧爾・中村元保・吉田正勝共訳 法政大学出版局。
 1978 『文明化の過程(下)——社会の変遷/文明化の理論のための見取図——』波田節夫・溝辺敬一・羽田洋・藤平浩之共訳 法政大学出版局。

ESCARPIT, Robert

- 1958 *Sociologie de la Littérature*. Press Université de Paris.

FAUSTO NETO, Antônio

- 1979 *Cordel e a Ideologia da Punição*. Vozes.

FERREIRA, Aurélio Buarque de Holanda

- 1975 *Novo Dicionário Aurélio*. 1ª ed. Editora Nova Fronteira.

FERREIRA, Orlando da Costa

- 1976 *Imagem e Letra—Introdução à Bibliografia Brasileira*. Edições Melhoramentos.

FERREIRA, Jerusa Pires

- 1979 *Cavalaria em Cordel.—O Povo das Água Mortos*. HUCITEC.

FONSECA de Santos, Idelette

- 1979 La Litterature Populaire en Vers du Nord-Est Brésilien. *Imaginaires, Cause Commune* 1979/1: 187-223, (Coll. 10/18). Union Generale d'Éditions.

FURET, François and OZOUF, Jacques

- 1977 *Lire et Écrire. L'alphabétisation des Français de Calvin à Jules Ferry I*. Ed. de Minuit.

GOODY, Jack

- 1968 *Literacy in Traditional Societies*. Cambridge University Press.

荒井 ブラジル北東部における民衆の小冊子

- HOGGART, Richard
1957 *The Uses of Literacy: Changing Patterns in English Mass Culture*. Chatto & Windus.
- KOSHIYAMA, Alice Mitika
1972 *Análise de Conteúdo da Literatura de Cordel: Presenças dos Valores Religiosos*. Escola de Comunicações e Artes. Universidade de São Paulo.
- LESSA, Orígenes
1973 *Getúlio Vargas na Literaturode Cordel*. Documentário.
- LORD, Albert B.
1965 *Singers of Tales*. Atheneum.
- LUYTEN, Joseph M.
1979 A Ilustração na Literatura de Cordel. *Comunicações e Artes* 8: 5-16.
1981 *Bibliografia Especializada sobre Literatura Popular em Verso*. Escola de Comunicações e Artes. Universidade de São Paulo.
- MANDROU, Robert
1964 *De la Culture Populaire aux XVII^e et XVIII^e Siècles*. *Le Bibliothèque Bleue de Troyes*. Stock
- MARANHÃO, Liedo
1976 *Classificação Popular de Literatura de Cordel*. Vozes.
- MARCO, Joaquim
1977 *Literatua Popular en España en los Siglos XVIII y XIX*. 2 vols. Taurus.
- MAURÍCIO, Ivan et al.
1978 *Artes Popular e Domínio (O Caso de Pernambuco 1961-1977)*. Ed. Alternativa.
- MOURA, Abdalaziz de
1978 *Frei Damião e os Impasses de Religião Popular*. Vozes.
- NEUBURG, Victor E.
1977 *Popular Literature: A History and Guide*. Penguin Books.
- NISARD, Charles
1864 *Histoire des Livres Populaires ou de la Littérature du Colportage*. 2^e éd.
- PINHEIRO, Maciel
1955 *Linguajar Nordestino*. (mimeo.)
- PROENÇA, Ivan Cavalcanti
1977 *A Ideologia do Cordel*. 2nd. ed. Brasilia.
- PROPP, Vladimir
1970 *Morphologie du Conte*. Marguerite Derrida trad., Seuil.
- SLATER, Cadace
1979 Folk Tradition and the Artist: The Northeast Brazilian Movimento Armorial. *Luso-Brazilian Review* 16(2): 160-190.
1982 *Stories on a String. The Brazilian Literatura de Cordel*. University of California Press.
- SOUTO MAIOR, Mário
1970 Antonio Silvino no Romanceliro de Cordel. *Revista Brasileira de Folclore* 10(26): 45-53.
- TAVARES Junior, Luiz
1980 *O Mito na Literatura de Cordel*. Tempo Brasileiro.
- VENANCIO CARLOS ET ALS. (ed.)
1976 *Literatura de Cordel. Vol. 1 Antologia*. Global.
- Watt, Ian
1957 *The Rise of Novel*. Chatto & Windus.
- ZUMTHOR, Paul
1980 L'écriture et la Voix (D'une Littérature Populaire Brésilienne), *Critique* 37(394): 228-239.